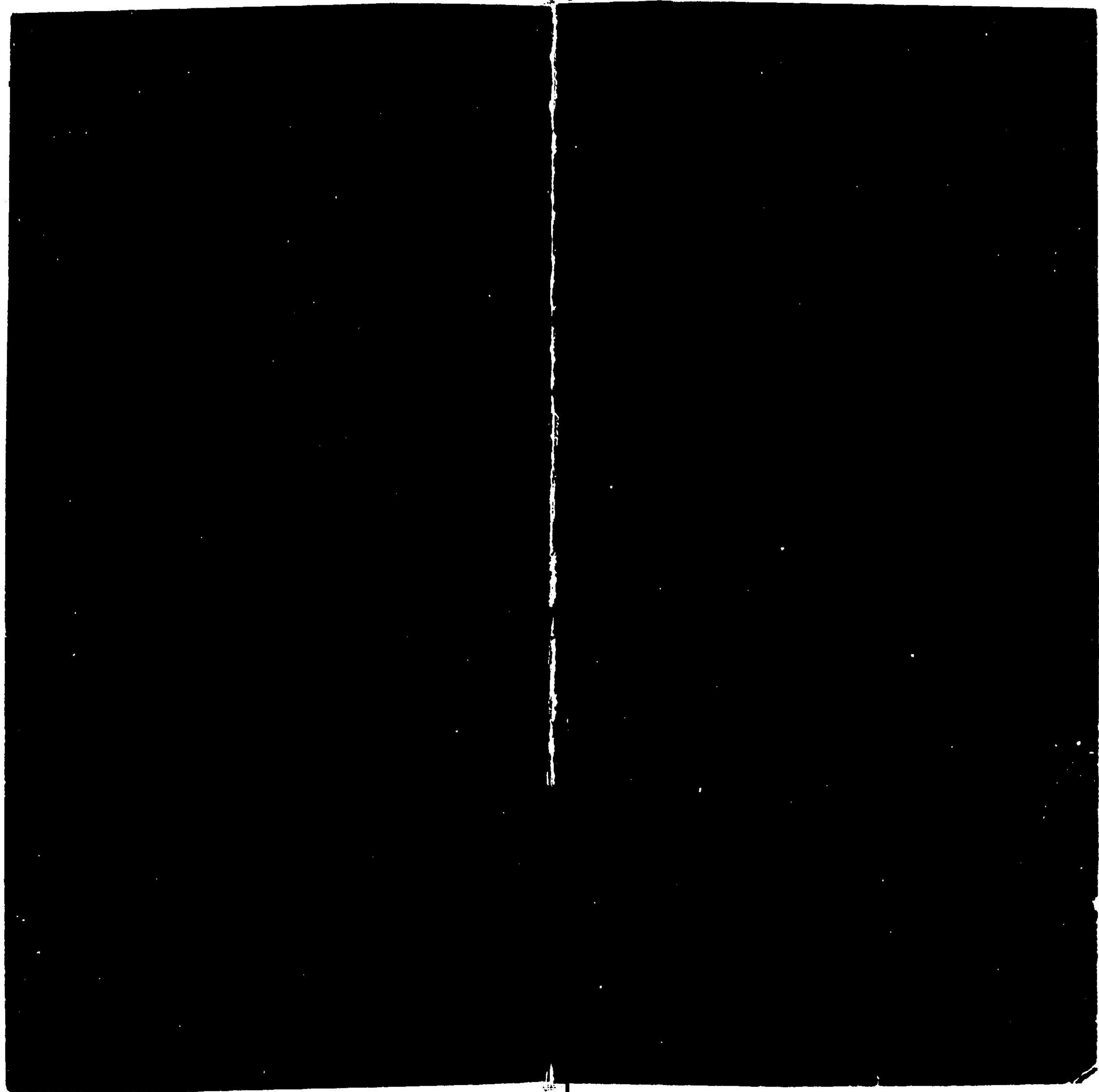




3995

薩
摩
比
羅
歌

22
75



特63
665

緒言

薩摩藩は、四百
 年前永正太永の頃薩摩
 國主相模入道日高が
 當時漸く萎靡せんとす
 振興めんとして自ら
 歌曲を案出し以て彈
 謠さるる切なる
 のなり去れば其の
 歌曲や雄大悲壯に
 して嗜々切なる
 眞に儒夫をして起
 だしむるに足る若
 し夫れ今日の
 合其の歌曲が世に
 益するや否やの如
 きは多言を費す
 事なしと云ふ事
 の

内交

吟者心得

一 何事をなすにも熱心と同情とは必要缺くべからざるものなれども薩摩琵琶は殊に其の必要大なり

二 本歌を誦はんには喉元の聲ならで腹より出づるやうせざるべからず

三 別に定まりたる符なしされば讀みもて行く中に勇ましき處は勇ましげに活潑にまた悲しきところはかなしく憐れげに誦ふべし言ひ換ふれば文字にて現はされたる

情を音聲にて言ひ現はすなり

四 定まりたる符とてはなけれを昔より左の六つの符の如きものを都合よく配合することのみ約束となりおれり即ち

- 一、切り
- 二、上ん
- 三、崩れ
- 四、吟變り
- 五、止め
- 六、ヒ

の六つにて琵琶を習はんと思ふ人は以上の事を識者に學びあとは獨習すること易く且つその方上達し早し

五 本書歌中「は切り、は吟變り△は上ん○は崩れの場

所を假かりに示ししたるもの學まなぶものよく意いを止とめて自みづから發は明あする所ところあれかし

明治乙巳猛春

編 者 識

目 次

扇 <small>あ</small> の的 <small>てき</small> 初 <small>はつ</small> 段 <small>だん</small>二二	鳥井強右衛門.....二一	臺灣入.....七	戦後の月.....五	討魔の歌.....四	松.....三	白櫛隊.....一
春の調.....四一	赤根染.....三七	櫻井.....三五	二段.....二六	小敦盛初段.....二一	三段.....一七	二段.....一五

蓬萊山	四二
老蘇の森	四三
武藏の野	四五
梅が枝	四六
汝の旨	四八
似我蜂	四九
遠矢	五一
甲斐殿道行	五六
胡蝶	六一

國の船	六二
千代の春	六三
花の香	六四
菊水の旗	六六
兒島高德	六七
若武者	七〇
面影	七一
千早振	七二
城山	七三

墨繪	七五
王政復古	七八
戀の山	八一
物の狂	八三
月の瑟	八五
灘の廻	九〇
啞の夢	九二
王昭君	九四
詩人の夢	九七

遠近	九八
小督	九九
月と花	一〇三
川中島	一〇五
熊本籠城	一〇九
譽れの駒初段	一一二
二段	一一七
三段	一二三
粟津の露初段	一二七

二

段

.....一三三

三

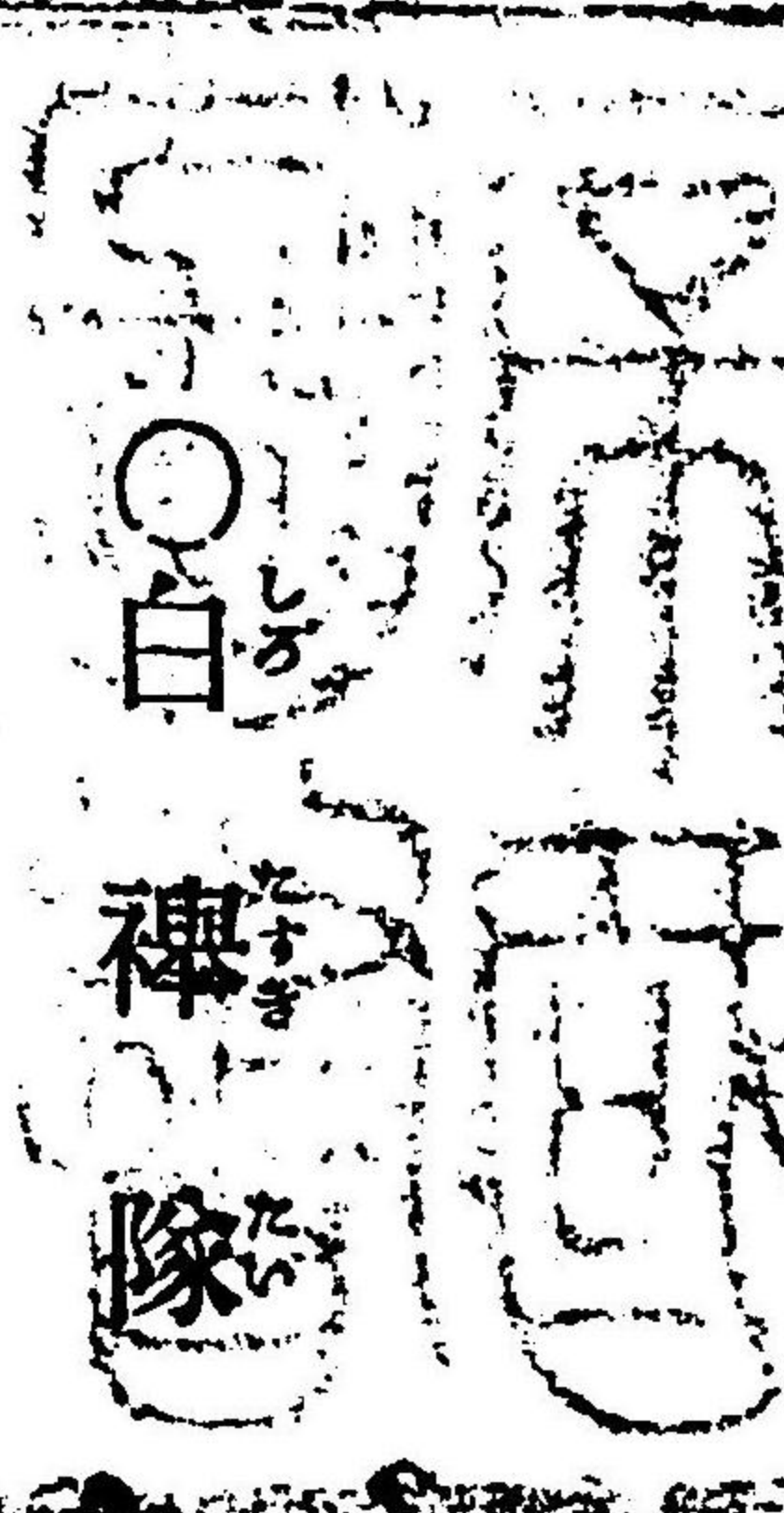
段

.....一三七

目

次終

薩摩琵琶歌



柳 涯 漁 夫 著

抑も爾靈山と申すは旅順の港を眼の下に隈なく見下す要害の地にて高
 さは三百三呎全山岩に包まれて鑿もて削りなすがごと峻嶮實に極
 れば守るに易く攻むるには類ひもあらぬ難所にて一夫これをまもれば
 『方夫も進み能はじな』頃は明治三十七の年の霜月末つかた黄海の彼

方月落ちて黑白もわかぬ眞の關彼方此方の壘にも唯一點の火影さへ見
 ぬす天籟聞として吹き來る胡風腥く「啾々の鬼氣人に迫る」時しもあれ
 や何事の起りてしけん打ち揚ぐる敵の火箭の五つ六つ關を裂さき四邊
 を照しつるべうちを打ち出す小銃の響き大砲の音實にすさまじきを
 が中を物ともせずに行みゆく健氣な一手そもこれは中村將軍指揮の下
 此の山取らでは歸へらじと競ひ合ふたる日本武士國に盡すの赤心は定
 めて神ぞ白禱せなに十字と綾とりつ彈丸の霰も何のそのおめき勇んで
 突き進む慄悍決死の大丈夫が「戦ふさまぞゆかしけれ」さはさりなが
 ら此の山は嶮しき上に敵軍の守りのいと厳しくて蜂の巢口にさも似

たる機關砲より絶え間なく打ち出す彈丸は雨霰面を向けんやうもな
 し嗟悲しくも悼ましや心矢竹にはやり雄が掛けにし禱白色の暫しも待
 たで血汐染赤さ心を大君に捧げて残る方もなく或は傷つき或は又討死
 なせし甲斐ありて此の要害を我れに収め遂に東洋双びなき難攻不落と
 誇りたる旅順の塞要陥落の基をなせし諸勇士の勳は高し爾靈の山千代
 万代の後までも「語り傳へて仰ぎこそすれ」

○松

松の操にならへとや世にも優れしますらをの訓め草にしめされし常磐

の松の色深く雪の谷間に生ふるとも榮はし色は武士の『赤き心にさも似たり』

○討魔の歌

弱きは碎けよ寡なるは呑め『人道正義何かある』人屠らば血をすれ家を壊たば火を放てかくて汝が狂ひ行く世は常闇となり終ぬ紅蓮の焰天を敵ひ腥臭き風地をつゝみ野に屍のうづたかく巷に悲歎の聲みつを真紅の血汐なめづりて『心地よげなる汝が姿』大神はるかに見そなはし左右の神に云ひけらく今に悪魔をくだかずば世はとこしへに闇

ならん正義の爲めに劔を執れ人道の爲の血を流せ使神下り立つ倭島はるかに北を指さして行け日本の大男子悪魔の誇り打ちくだき世をそこやみに救ひ出し大御心を安むべし血に飢ゐれば血を啜れ肉に飢ゐれば肉屠れ吐き出す毒氣ふく焰投ぐる火の玉打つ刃神の聖慮をさげすみていつまでしかく狂ひ得ん降魔の劔ぬきはなち正義の銃に火をきれば毒氣は散じ焰失せ大地に倒る悪魔軍無明のやみは明らかに凍として立つ日本武夫』

○戦後の月

夜もふけ行きて鐘こふる草はむ風はおと高く『月の光りの影さむし』
 ひいき渡りし砲の音もしづまりはて、今はしも霧立ちこめし水の面に
 友をはなれし川千鳥聲ぞ身にしむ鴨縁江のほとりの松におく露は梢に
 たふてひたくと『砂の中にまろびいる』大御心を身よしめて敵をね
 らひし砲先のなげきは今の我れに受け吹きくる風ようちなびく野邊の
 草むら枕して葉末にあへぐ螢火かてがらも立てすうたかたの消ねゆく
 身こそかなしけれいよく眠る萬象に寂しさいと増鏡何故天はすみ
 つるぞなに故つちは戦ふぞ天の心は地になさか澄むとは余川の名のみ
 にて血汐にしぼる月魄におぼろの姿かすませてすめるは天の姿なり

『さわぐは地のすがたなり』聲する方をなかむれば銀盤瑠璃の月白く
 下界の塵を吹く風にこの世のあかを洗ふ音『ありおれ河の瀬は高し』

○臺灣 入

皇の御稜威は四方に輝きて清國遂に和議を乞ひ臺灣島を献納し合戦茲
 に治まれる『君が御代こそ目出度けれ』臺灣島の土賊等龍車に向ふ蟻
 螂の斧を振ふときこゑしかば征討の師をば遣はさる、近衛兵の精兵を
 率ゐて御渡海遊ばせしは陸軍の中將大勳位北白川の宮と金枝玉葉の御
 身なり三貂角の御上陸幕營ありし其の跡に木を削りてぞ印さる、炎熱

燃ゆるが如き日も三貂大嶺の險をば馬にも召されず越ね給ひ大雨しきりに降る時は濡れにぞ濡れて進まるゝ士卒も之れに感激し病兵さへも立ち上り命を惜まず進軍す諸所の砦に籠りたる賊兵等打出す彈丸は雨か霰か白雪の降り注ぐが如くにて砲煙暗く天を覆ひ白雪等しく降つるに似たり宮は矢石を犯しつゝ突撃せよとの命令に川村少將小島大佐を前として勇み立ちたる近衛兵我れ先きに突進して敵の本營に突て入る賊之れに氣を吞まれ右往左往に逃げ散りて降参するもの數知れず大砲小銃の戦利品山をもつかんばかりなり宮は此の時悠々と基隆城に入らせ給ふ斯くて六月十日には臺北城を陥いれ七月には新竹城を占領し明

る八月には彰化臺灣の兩府を定め十月の初め方臺南指して進まるゝ天暑くして瘴癘多く地嶮しくして糧道絶ゆる千辛万苦の其の中に宮は士卒と食を分ちひるは汗馬に鞭をあて夜は荒野に露營して只國の爲め君の爲め平定の策を廻らし給ふ嗚呼御痛はしや悲しやな竹の園生の御身にて餘りに辛苦を積ませられ遂に御病氣に罹らせ給ひ日々に重らせ給ふやう御供の人々打ち驚き都に歸らせ給ふやう切に御諫め申せども宮はいつかな聞し召されず我れ官軍の將として賊等平定見ぬ中にたどへ我が身は臺灣の土となればとて士卒のみ打ち棄て如何で都へ歸るべきかこに召されて進まるゝ御臨終の其の際に賊徒平定と聞し召し宮は莞爾

と打笑みて只萬歳とばかりにて「敢へなく天に登り給ふと傳へ聞く」
日本武の古を今日の前に見参らせて國中の民も勇士も慟哭せぬはな
かりける去りながら昨日今日とは思はねども老弱不定に貴賤なし唯人
は名こそ惜しけれ皆人は名を後の世に残せかし

臺北融々仁政成 皇軍至所涌觀聲

旭光將被臺南地 殲滅土魁安万世

と宮の吟ひ給ひし如くにて盛功偉烈後の世に輝き渡るぞ有難き北白川
の水は逝きて歸らねども月影永く澄み渡り光は「世々に流らん」

○鳥井強右衛門

十重に二十重に敵のため打ちかこまれし危ふさを扶けの勢に告げんと
て降續きたる霖雨を又なき機會と忍び出で「つばらに云ひつぎたりけ
るが」其の歸るさに敵兵の斥候のやからにあやしまれしもとの下に
くられつ露よりもろき玉の緒も嵐の爲めに散り行くを悟れど如何に大
丈夫が磨き上げたる一筋の心を城に通せんと操の爲めに勇ましく「命
を落せり勇ましく」

○扇の的

吉原重隆作

八島の内裏のこなたなる牟禮高松の在家にあたり火の手ありといふ程こそあれ見るく四方に廣がりて『黒煙天をぞ掠めける』阿波の民部大音上げ今の煙は手過ちにあらす源氏の兵火を掛けたりと覺わたり軍の用意せよと走せ廻る時は元暦二年二月十八日未だ東雲の程なれば城中俄かに騒ぎ立ち上を下へと返しつゝ制止すれども聞き入れず主をすて親を顧みず我れ先にと逃げまよふかゝる處に源氏の大將軍九郎判官義經は紺地の錦の直垂に紫裾濃の鎧に鍬形打たる白星の甲に紅の母衣かけて廿四指たる小中黒の征矢を負ひ重藤の弓持ちて金作りの太刀を佩き黒き馬の太く逞しきに白覆輪の鞍置て眞先に進み畠山重忠熊谷

直實平山季重土肥實平佐々木高綱其の外宗徒の郎黨を引具して城の追手に寄せ來り木戸内目がけて切て入れば平家方にも音に聞ゆる越中次郎兵衛盛繼上總五郎兵衛孝光惡七兵衛景清切先を揃へて打て出で追つ捲つ受けつ流しつ鎬を削り罅を割り火花を散らして攻め戦ひ組んで差違ふる者あれば眞甲割られて倒るゝあり手負ひを助くる暇なく死骸をあぐる隙もなし互に名ある勇將猛士こゝを専途と戦ふさまいつ果つべくも見ぬざりしに牟禮高松の黒煙次第次第獲ひ來て已に矢倉も焼け落ちければ平家も今は叶はじと各船に取乘て沖邊はるかに漕ぎ出でぬ行方定めぬ波の上須摩や明石の浦々もよるべ渚の捨小舟おきにしなれ

もしらま弓いつしか今は引かへて今日の味方の翌日の敵てきかみかた
 か矢か楯かふち瀬しられぬ船の中心細くも帆を上げて風に任かする身
 の上は思ひしられて果なけれ爰に平家の船の中より花やかに飾りたる
 一艘渚に添ふて漕ぎよする頃は二月二十日の事なれば霞も風にうちな
 びく柳の五重に紅の袴着て袖笠被げる女房あり紅に旭描きたる扇を杖
 に挿しはさみて舟の舳頭に指立て是れあそばせとぞ招さける此の女房
 は嚮に建禮門院の後立の時千人の中より撰まれし玉虫の前とて舞の上
 手と聞ゆしが歳は今年十九歳雲の髪かすみの眉はなの貌雪の肌繪に畫
 くともいかに筆に及ぶべき折節夕日に映ひて『いとゞ色こそまさけり

れ』

二 段

鬼を欺く大丈夫が互に生死をあらそひて船と陸とに立ち分れ弓矢手挟
 み拳を握りにらみ合ひたる折にしも面白の景色やなそゝる浮立つ人ご
 ころ波も玉散る海の面に花にかすみに別れ來し都の春の空をしも思ひ
 浮びて打ち眺め修羅場變じて忽然に風流界とぞなりにける判官是れを
 見たまひて畠山重忠を召されあの扇射よといふを射ずして置かむは無
 念なり射られなんやいかにと申されけり重忠畏まり君の仰せ家の面目

とは存すれど是は由々しき晴れの藝なり重忠打物探ては鬼神と云ども
 更らに辞退は仕つらず候へども弓矢は不骨に候へば若し射損じ候ては
 私わたくしの恥はぢはさることなれど『源氏一族の御環瑾と存するなり』爰に味
 方のうちにして下野國の住人那須の太郎助宗が子に那須十郎兄弟は箇
 様の小ものは賢しく仕ると承はる彼等のうちに仰せ付けられ然るべし
 と申しければ直に十郎をぞ召されける十郎畏まり御誕の上は仔細申す
 べくも候はねども去年一の谷の阪落しに馬弱くして弓手の臂を砂につ
 かせ侍ひしが疵なほ癒へず候ひて定の矢仕るべくも候はず弟の與市こ
 そ一定仕り候はん仰せ付けられ候へと『弟に譲つてぞ控へける』

三 段

宗高其日の装束は紺村濃の直垂に緋絨の鎧着て鷹川反の甲を猪首に着
 なし廿四指たる中黒の矢を負ひ重藤の弓を持ち赤銅作の太刀を佩き宙
 赫白毛の馬の逞ましさに洲崎に衛を散したる貝鞍置いてぞ乗たりける
 判官の召に従ひ御前近く馬より下り甲を高紐に掛けて畏る判官あの扇つ
 かまつれ晴の所作なるぞ不覺すなど命せらる宗高承り仔細申さんとす
 るを伊勢三郎後藤兵衛口を揃へ面々の故障に日も早や暮なんとす兄の
 十郎指し申たる上は仔細候まじ海上暗くならば由由敷味方の大事なり

疾々急ぎたまへと云ければ今は辞すべき様もなく宗高御請をなし甲を
 童に持たせ烏帽子引き立て薄紅梅の鉢巻して手綱搔くり「扇の方へど
 向ひける」生年十七歳色白くして小髭生ひ弓の取りやう馬の乗姿優
 な男とぞ見ゆたりける渺々たる白砂に駒を歩ませて波打際に打寄せ見
 れば弓手の方には主上を始め奉り國母建禮門院北の政所二位殿官女其
 の外船を漕ぎ並べ楊梅桃李と飾られて屋形の前後御簾も几帳もさいめ
 きたり妻手の沖には平家の大將軍大臣殿を始めとし平中納言教盛新中
 納言知盛以下平家の一門其餘の諸將居並びて數百の兵船を乗り浮べ
 鎧の袖を列ねて是れを見る後の方には源氏の大將軍九郎判官義經を始

め士大將に至るまで各駒を乗居て拳を握り片唾を呑み鳴りを静めて音
 もなし其の所しも潮の遠淺なり鎧の菱縫 板鞍爪の浸るまで打入は勇
 み立たる馬の癖いよいよ悍りて静まらず手綱陶居鎮むれど寄來る波に
 物悞して足も定ず狂ひけり折しも西風吹き來り舟は波間に漂ひて扇も
 申に定まらず隙なく風に狂ひたれば何の處を射べしとも覺えず日も早
 や西に傾きぬ宗高運の極りと眼を閉ぢ心を静め南無八幡大菩薩別て故
 郷那須大明神弓矢の冥加あるべくば扇を座席に定て給へ若し射損する
 もものならば弓折り捨て自害して二度人に面を合はすまじ今一度本國に
 歸さんと思召さば此の矢外させ給ふなど心に深く祈念して眼を開き打

ち見れば風少し吹き弱り扇座席定まりぬ借ては神力指添はれて手の下
 なりと勇みつゝ矢頃は少し遠けれど十二束三伏の鎗矢拔出し重藤の弓
 に打ち番ひ暫し堅めて思ふやう扇面の目を射るは天の恐れも如何なり
 要をこそと狙ひて切て放つ其の矢海上遠く鳴響て要の上一寸ばかり置
 て吻と射切たり要は船に残て扇は空に上りつゝ翻々と閃きて海へ颯と
 ど落ちたりける折節夕日に輝きて波に漂ふ光景は立田の川の秋の暮三
 室の紅葉に異ならず源民は鞍の前輪や籠を叩き平家は舷を打ち敵も味
 方も同音に喝と揚げたる鯨波の聲暫は鳴も『止まざりけり』嗚呼宗高
 が此の日揚げたる榮譽の名八島の浦に打ちよする波もろともに代々を

経て『盡くる期なきころ目出たけれ』

○小 敦 盛

島津兵庫作

祇園精舎の鐘の聲諸行無常の響あり娑羅双樹の花の色盛者必衰の理を
 顯はし奢れるものゝ久しからず只春の夜の夢の如し猛き人も『終には
 亡ふる習あり』偏に風の前の塵に似たり借も此の度平家源氏の戦ひに
 ものゝ哀を留めしは平家方の一族母衣大將の其の内に無官の太夫敦盛
 なり敦盛其の日の出立は練ぎぬに鶴縫ひたる直垂に萌黄匂ひの鎧着て
 鐵形打たる兜の緒をしめ廿四さいたる切り班の矢を負ひ重藤の弓を持

ち連錢葦毛なる駒に金覆輪の鞍を置き御身輕げに召されしはさも勇々しくぞ見ぬにける御一門と同じく主上の御供召され濱に降らせ給ひしが御運の末のかなしさは御父經盛卿より譲りたまひしさねだと言へる漢竹の名笛を内裏に残し置かれしを若上臈の悲しさは捨て、も御出あるべきに敦盛は一の谷の戦に狼狽し秘藏の笛をも取敢へず逃げ出でたりと云はれんは末代までの恥辱ごと取りに歸らせ給ひしが時刻移れる其のひまに御座船も兵船も遙の沖に漕ぎ出たり痛はしや敦盛詮方なくも撫屋の方を心懸け駒に任せて落ち玉ふ「心の内ぞ哀れなる」其は偕て置き茲に又武藏國の住人熊谷次郎直實は此の度一の谷の先陣を承は

り未ださしたる功名も顯はさず無念至極に思ひつゝ天晴れ茲に好き敵もかな押並べ引組んで功名せばやと思ふ折しも遙かに敦盛を目掛け駒引寄せ打乗り跡を慕ふて追ひ驅る體て直實大音揚げそれに落ちさせ給ふは平家方に於ても好き大將と見奉る斯く申す某は武藏國の住人しので黨の旗頭熊谷次郎直實なり源氏方に於ても隠れなき敵にあるものを正なくも敵に後を見せ給ふもの哉早や引返し御勝負候へと扇を揚げて招きけり敦盛は更らに耳にも入れず走馬に鞭を加へつゝ浪打際まで落延び給ひ日の丸の扇を打開き沖なる船を招かせ給へば船中の人の其の中に門脇殿御覽じて伊賀平内左衛門元國を召され如何に元國あれを見よ

母衣懸け武者の唯一騎船を招くは左馬頭行盛敷又は無官の太夫敦盛か
 孰れも見よとの御諛なり悪七兵衛景清承り某見定の參らんと白柄の長
 刀杖に突き船の艦に立ち上り甲を傾け遙の磯邊を打ち守り嗚呼悼はし
 の御事やあれにましますは修理太夫經盛卿の御子無官の太夫敦盛にて
 渡らせ給ふぞよ御馬の毛色鎧の袖印に至るまで聊違ひ候はず門脇殿聞
 し召され敦盛ならば此の船を早く寄せよと宣へば水手楫取畏まり俄か
 に櫓楫を立て直し船を磯邊に寄せんとすれど此の日頃吹き續きたる北
 風の名残にて天に漲る白浪は恰ら雪の山に似たり小船ならばおのづか
 ら左手右手にも押し廻さるゝものなれど殊に勝れし大船に而も大勢乗

りたれば磯邊に寄すべき様もなし敦盛遙かに之れを見て斯ては叶ふま
 じいざ彼の船に遊さ着かんと駒の手綱をかい操て海中へさつと駆け入
 れ浮つ沈みつ五反ばかりは出たりしが駒逸物なれど逆巻く浪にせかれ
 つゝ泳ぎかねてぞ見ぬにける直實此の様を見るより大音揚げ如何に若
 君あれ御覽候へ平家方の御座船は遙に程を隔てたり然も浪風荒ければ
 泳がせ給ふこと叶ふまじ疾く引返し御勝負候へ返し給はぬものならば
 後より中指を射て參らせんと弓と矢を打ちつおひ徐に引てぞかゝりけ
 る敦盛こゝを遁れ落ちんとすれど若も源氏の鏑矢に射留められては平
 家末代までの恥辱なりいざ勝負を決せんも駒の手綱を引返し海中より

颯と馳せ上り染羽の鏑矢打ちつがひ斯とぞ咏じ給ひける

梓弓矢をさしわけて引時は

かへす心を知るか其の君

と遊ばし給へば熊谷も心ある弓取なればあつと驚き取敢ず

いたづきのはやはづれぬと思ひしに

やと云ふ聲にたちぞどいまる

と返歌をなして心静かに待ち受けたり

二 段

さる程に敦盛は懸て打物の鞘をはづし熊谷に切てかゝれば直實しかと
受け止め受けつ流しつ追つ追はれつ二騎並んで面もふらず茲を専途と
戦ひしが未だ勝負も見ぬざるに敦盛いざ組まんと打物彼處に抛け棄て
馬が間にどつと落ち上を下へと揉み合ひしが痛ましや敦盛心は猛く勇
めども強氣の熊谷ものゝ數ども思はねば敦盛を心安く取て押へ既に首
を搔かんとするにあまり手弱く見ぬければ差うつむいて御さうがうを
見奉るに薄化粧にかね黒の有様は容顔美麗にして恰も殿上人の年の頃
十四五ばかりと打見わて嬋妍たる兩鬢は空蟬の羽に比へ是はいにしへ

業平の交野の御野の狩衣袖打ち拂ふ雪の下書にうつすとも此の若君の
 其の御姿は中々筆も及ぶまじ餘りの悼はしきに少くつるげまらせて
 如何に若君平家方に於ては如何なる公達にて渡らせ給ふやな御名字を
 名のらせ給へどありければ敦盛は世にも苦しき息をつさ倍は武藏國の
 熊谷は文武二道の勇士とは聞きつるに何とて合戦に法なき事を言ふや
 我は天下の朝臣として雲閣の座に連り詩歌管絃の席に侍る身なれども
 又武士の誠むる道をも粗承はれり夫れ武士の名乗ると云ふことは互
 の陣に群て胡籙箴を腰につけ打物互に抜き持て我は何國の何某と名乗
 てこそ勝負は致すなれ我今敵に組敷れ下より名乗ると云ふことは今ぞ

初めて承はる直實聞て仰せはさなれと苗字をあらはし首を取り直實が
 譽を顯さん爲なり敦盛それは隠れもあるまじ其某が首を取り御邊が主
 の義經に見せ給へ若も義經見知らずは蒲の冠者に見せて聞へ蒲の冠者
 も見知らずは此の度一の谷の戦に平家方生擒の者も多くあるべし彼の
 者共に引き向けて誰が首ともわからずは其の時こそ名もなき者の首と
 諦めて只叢に捨て給へ直實聞て倍ては中々武士の勇める道を委しく
 知し召されけり世に憂きものは斯くして候へ君の仰せに従ひ御首給は
 らんとすれば親と合戦子と争ひ花の下なる半日の影月の前なる一夜の
 友清風朗月飛花落葉の如くなり嗚呼此の度一の谷の合戦にて直實が参

り合ふことより前世の事と思し召し御名字を名乗らせ給ひなば只奉公の
 其の忠に後世を弔らひ申すべし敦盛はいつまでも名乗るまじとは思へ
 ども後世を弔はれん其の嬉しさに如何に直實我れを誰とか思ふらん門
 脇の修理太夫経盛が末子太夫敦盛とは某なり年は今年十六歳軍は今日
 が初なりさばかり物を尋ねずに早や首取れや熊谷と宣へば直實開て泪
 を流しさらば敦盛卿にて渡らせ給ひしか某が一子小次郎直家も今年年
 は十六歳借ては御同年にてましますよな直家此の度一の谷の初陣に先
 駆いたし弓手の腕に矢を射られ某に向ひ此の矢を抜いて給はれと申せ
 しが如何に直家敵と味方とその中にて何とて心弱き事を云ふやな若も

其の手が深手ならば駒より下りて自害せよ又薄手ならば敵と引き組ん
 で打死せよしの黨の名を汚すなどひとつと白眼みしに某方を一ト目見て
 敵の陣所に駆け入るを其の時後姿を見しばかり今二目とは見ざりけり
 子を思ふ闇に迷ふは親心今身の上知られけり嗚呼直實がはかなき命
 をなからへて』武藏國に歸り直家が打死と申し聞かせなば誠に母も歎
 くべし況てや御父経盛卿に於ても花の様なる若君を磯邊に一人御残し
 さぞや歎かせ給ふらんあはれ高きも卑しきも子を思ふ身は異ならず今
 若君獨り打ち奉り直實が恩賞に預るとて千歳をたもち万年の譽を何か
 せん末代までの御物語りに助け参らせばやと思ひいかに若君歸らせ給

ひし後御父經盛卿に仰せ上げらるべきことは武藏國の熊谷と組んで候
 ひしが一子小次郎直家に思ひ替へ助け參らせ候と能々御物語り候へと
 云ふより早く引起し鎧に付いたる塵打ち拂ひ駒に打ち乘せ奉り直實共
 に打乗り暇乞ひして五丁許は見送しが後の山に關の聲誰ならんと見返
 せば弓手の方には森田平山扣へたり右手の方には虎衛殿佐々木四ッ目
 の紋の旗を押立て上の山には御大將九郎判官源の義經白旗を靡かし膝
 元に取ては武藏相摸龜井片岡伊勢駿河源氏の一族聲々に呼はりけるは
 武藏國の熊谷は敵と組んで候ひしが已に組敷ながら助くるは必定逆心
 と覺ひたり二心なら熊谷をもに打取れと聲々に呼はりければ直實も

今は詮方なく又扇を揚げて招きよせ如何に若君あれを御覽候へ如何に
 もして助け參らせたくは存じ候へと味方の軍兵雲霞の如くに満みちた
 りよもや逃らせ玉ふまじ哀れ願はくは某が手に掛け奉り後世を弔ひ申
 すべしと有りければ敦盛涙を流し給ひ此所を逃れゆく先きにて賤しき
 者の手に掛け面を曝さんも無念なりか及ぶ義理ある武士の手にかけり
 討たるものならば恨む可きことさらになし早や首取れや熊谷と西に
 向ひて手を合せ覺悟極めて御在します鬼を欺く熊谷も心も亂れ氣も消
 えて何處に太刀を當つべしとも思へず途方に暮れて居たりしが櫓番所
 の前なれば是非に及ばず敦盛の花の印を水もたまらず打落すさしも剛

なる熊谷も其の儘死骸に抱き付き濱に伏してぞ歎きける弓矢取る身の
 かなしさは様々心を取り直し敦盛の死骸を引立て見るに弓手の方には
 卷物一卷差されたり其の卷物を取り上げ見れば今度都出の事を委しく
 書き記し右手の脇には漢竹の横笛に扇を添へて差されたり頓て敦盛の
 御骸を葬り駒ひき寄せ打乗りて武藏國の熊谷が平家方一族母衣大將の
 其の中なる無官の太夫敦盛を打取りたり、凱歌をどつと揚げ陣所を指
 して引て行くやがて敦盛の御首を御大將實檢召されし後直實に給はる
 直實は給ひし首を押し戴き弓も刀も抛げ棄て、髻切りて武士を捨て鎧
 の袖を墨に染め其の名を蓮生法師と呼び新黒谷に引籠る三年が間終

夜法華經百万扁を唱へ敦盛の追善を營みけり是も敦盛御最期の其の
 時に一念の言葉をかはし又熊谷が武士の情ありしゆゑぞかし嗚呼此の
 事を何と聞ても唱へても憂きは世の中義理は熊谷物の哀れを留めしは
 敦盛卿にて諸事の哀れを留めたり

○櫻井

延元元年五月の事かどよ賊帥足利尊氏直義等西國の兵を將ゐて都に攻
 め上らんとしければ朝廷「楠判官正成を遣して之れを攝津に拒がし
 めたまふ」其の時正成は櫻井の驛に至り一子正行を前に召び「肌守

りを取り出でて言へるやう』是はこれ忝なくも帝より下し賜ひし繪旨
 なり是を汝に與ふるぞわれ鬼も角もなるのちは世は黒髪くろかみの亂れあひ賊
 等らいよいよ時を得て叡慮えいりょを腦なまし奉ること鏡かがみにかけて見るが如しやよ正
 行ちかよく汝は稚わかきものながら父の子ならば兼てその忠義ちゆうぎの道は知りつ
 らん河内かはちに歸りて人となりうち洩もされし郎黨らうどうを能く勞りて扶持ふぢしおき
 『弓張月ゆみはりつきの明らかに』家名いへなを天下てんかに輝あかし千代ちよに絶たぬせぬ菊水きくすいの旗はたを
 再び靡なびかして叡慮えいりょを安んじ奉れ正行泣なて父上ちちうへと俱ともに戰死せんしを請こひければ
 正成せいせい聲こゑを勵はげまして汝何なんとて斯かばかり身みに大任たいにんを負おひながら區々くくたる父
 の永訣えいけつに心こゝろを紊みだすものなるぞ我が子こにあらすと云いひければ正行伏ふして

聲こゑを呑のみ繪旨えいしを頂戴てうたい致いたしつゝ別わかれて河内かはちへ還かへりける『心こゝろの中なかを哀あはれな
 る』

○赤根染

大手おほての合戰がっせん急きゆうなりと覺おぼへて敵御方てきのみかたの関せきの聲相こゑあひまじ交まじりて聞きねけるが『實じつも
 此戰このたたかひに自ら相當あひあること多おほかりけると見みねて』村上彦四郎義光鎧むらかみひこしげに立
 つ所ところの矢や十六筋じゅうろくしん枯野かれのに残のこる冬艸ふゆくさの風かぜに臥ふしたる如ごとくに折懸おしかけて宮みやの御
 前まへに參まゐりて申しけるは大手おほての一ひとの木戸きど云いひ甲斐かひなく責破せきやられつる間二まにの
 木戸きどに支たて數刻すうこく戰たたかひ候まちする所ところに御所中ごしよちゆうの御酒宴ごしゆゑんの聲冷こゑひやしく聞きねつるに

付て参り候敵已にかさに取上て御方の氣の勞れ候ぬれば此の城にて功
 を立てんこと今は叶はじと覺へ候未だ敵の勢を外所に廻し候はぬ先に
 一方より打ち破りて一先づ落ちて御覽あるべしと存じ候但し跡に残り
 留まつて戦ふ者なくば御所の落ちさせ給ふものなりと心得て敵何所く
 までも續て追ひかけまゐらせんと覺へ候へば恐れある事にて候へども
 召されて候錦の御鎧直垂と御物の具とを下し給て御諱の字を犯して敵
 を欺き『御命に代り進せん』と申しければ宮争でか去事あるべき死な
 ば一所にてこそ兎も角もならぬと仰せられけるを義光言葉を荒らかに
 して斯る淺ましき御事や候漢の高祖榮陽に圍まれし時紀信高祖の真似

をして楚を欺かんと乞ひしかば高祖これを許し給ひ候はずや是れ程
 に言ひ甲斐なき御所存にて天下の大事を思召し立たれけるこそうたて
 ければや御物の具を脱せ給ひ候へと申して『御鎧の上帯を解き奉りけ
 れば』宮實にもとや思召けん御物の具鎧直垂まで脱替させ給ひて我れ
 若し生あらば汝が後世を弔ふべし共に敵の手に懸らば冥途までも同じ
 岐に伴ふべしと仰せられて御涙を流させ給ひながら勝手の明神を南へ
 向いて落ちさせ給へば義光は二の木戸の高櫓に上り遙に見送り奉りて
 宮の御後影の幽に隔らせ給ひぬるを見て『今はかうと思ひければ』櫓
 の木間の板を切り落して身をあらはにし大音聲を揚げて名乗りけるは

天照大神の御子孫神武天皇より九十五代の帝後醍醐天皇第二の皇子一品兵部卿親王尊仁逆臣のために亡ぼされ恨を泉下に報せん爲めに只今自害する有様を見置て汝等が武連忽ちに盡きて腹を切らんする時の手本にせよと云儘に鎧を脱で櫓より下へ投げ落し錦の鎧直垂の袴ばかりに練貫の二重小袖を卬膚脱で白く清氣なる膚に刀を突立て左の脇より右のそば腹まで一文字に掻切て腸抓かんで櫓の板に投げ付け太刀を口に銜へて「うつ伏に成てぞ臥したりける」大手搦手の寄手之れを見てすはや大塔宮の御自害有ば我先に御首を給はらんとて四方の圍をといて一所に集る其の間に宮は引違へて「天の川へぞ落させ給ひける」

○春の調

島津久光公作

新玉の年の始の壽や昔のまゝに吹さわぐる笛と鼓の音までも春の「開に聞ぬつ」玉簾ゆらぐ風たちて舞の袂も長閑なる神の齊垣の老松も枝を連ね葉を重ねうべも太夫の蔭高く齡を君にゆづる葉の常盤の色ど比類なき軒端に咲ける梅が枝も和泉式部の縁とや床しくかをる窓のうち「書みる袖にうつりくる」好文木の名に恥す又高砂住の江の松に相生の尉と媼妹脊の契末長く千世の例にひかれつ、四方の海原浪なきて吹くも静けき時津風枝もならさぬ御代の春千秋樂には民を撫で万歳樂

には『命を延ぶる樂みも』年ごとに今日汲みかはす盃に君と御國を祝ふなる『松ばやしこらめでたけれ』

○蓬萊山

日出度やな君が惠みは久方の光り長閑けき春の日に不老門を立出て『四方の景色を詠むれば』峯の小松に雛鶴棲み谷の小川に龜遊ふ君が代は千代に八千代に礫石の巖となりて苔のむすまで命ながらへて雨塊を破らじ風枝を鳴らさじと云へばまた堯舜の御代もかくやあらんかはと治まる御代なれば千草万木花咲き實り五穀成就して上には金殿玉樓

堯を並べ下には民の竈煙厚くして仁義正しき御代の春蓬萊山とは此れとかや君が代の千歳の松も常磐色替らぬ御世の例には天長地久と『國も豊かに治まりて』弓は袋に劍は箱に納め置く諫鼓苔深ふして『鶏も中々驚く様ぞなかりける』

○老蘇の森

數ならぬ身にさへ年も積るかな老は人をも嫌はざりけりと『連らぬ置かれし言の葉も』今身の上に知られたり『去れば是の世に生れ來て生老病死の四の苦を遁るゝ人は更になし彼の四の苦の其の内に何れ差別

は無けれども中にも老苦は哀れなる我が身ながらも思ひ遣るに右は容
顔美麗の姿にて月よ花よと人にも見られ假初の道行振りの花をも贈ら
れ文玉章を取り替し笠のはづれの際よりも人を見初むる目元まで嗚呼
辱かしやと思ひしことの『夢かど覺めて昔なり』衰へし姿見る度に悔
しきことの増鏡涙に曇る哀れさを詩にも歌にも記さるゝ白髪長來一夢
の中昨日まで乗りて遊びし竹の駒今日は早や老の坂ゆく杖と頼まん又
古歌にも

替り行く鏡の影を見る度に

老蘇の森の歎をぞする

と連れ置かれし言の葉が『今身の上知られたり』只人間の是の世に
在るは假寢の夢かうつゝの間なり

○武藏野

武藏野に草は種々多けれど摘菜にすれば倍も少し皆人は若き時より
『唯徒らに日を送り』才智藝能なき人は寶の山に入りながら空しく歸
るが如くなり偶々此の世に生れ來て真如の珠を磨かずば人と生れし甲
斐もなし只人よりは淺く思はれて犬の年老ゆる如くにて朽ち果つるこ
と無念なれ頼まれぬ世にもある哉月鼠戦く草葉の露の身なれば假令高

位長者の身となりて七珍万寶満々て榮花に驕る樂みも一夜の夢の如く
 なり歡樂極まりて哀情多しと古人も文に記さるゝ去ればこそ生々世々
 の樂みも心の中の月や花是を樂しむ人もなし會者定離盛者必滅の世の
 習春去り秋は蟬の聲偕も墓なき浮世かな引寄せて結べば草の庵にて
 『解くれば元の野原なり』少しきを足れりとも知れ満ぬれば月も程な
 く缺て行く十六夜の空や『人の身の上』

○梅が枝

春はまづ咲く梅が枝に谷の戸出る鶯の聲も聞えて高瀬掉す佐保の河原

に繰り懸けて最と『珍らしき岩躑躅』言はぬ思ひの色にしも井手の山
 吹藤咲て松にも花を春日野の緑はゑある若草に荒れたる駒も夏來ては
 御法の門に兼て後生を願はざる人の心が卯の花や橘匂ふ五月雨に山郭
 公音信て最とい昔を戀衣重ねて袖を濡すらん蘭省の花の時錦帳の下塵
 山の雨の夜草庵の中へ賦しおける詩の心にも同じ思ひの菅菴敷き忍び
 たるさびしさを誰とも知らで秋萩を植ゑて淋しき庭の萩薄も月も穂に
 出で、亂れ亂るゝ他野の草葉に於ける露の身の消ぬん便を松虫の聲さ
 へ今は霜枯れて雪白妙にふるさとを哀れと思ふ人もなし恨しの浮世か
 な嗚呼うらみしの此世かな』諸行無常の春の花は是生滅法の風に誘は

れ生滅々已の秋の月は寂滅爲樂の雲に隠れ僅も此の世に留まらずしか
 し又浮身を捨果てんと思へども流石又悪しき人の面影は断るに断られ
 ぬ煩腦の長さ絆に結ばるゝ身こそはかなけれ彌陀頼む人は雨夜の星な
 れや雲晴れねども西へ行く極樂を十萬億土と云ふなれど又越しなると
 聞ときは『爰を去ること遠からず』只有明の月の御舟は妙法の風に
 『任する身こそ安けれ』

○汝の旨

我は土なり灰なりと叫ぶ聖を思ひ出でゆめの名残や秋風のむかしを語

る幕の中たゞ白骨のあるを見る鳴の一聲山くれて壁のひわれの風白く
 瘦せ行く月の影高し運命よなんぢのしもべをばたゞしき人のます方に
 俱に安けくおきたまへうき世の中の差別をば『ひとしくするは汝の
 旨』

○似我蜂

情々有爲轉變の世を觀するに花も紅葉も一盛況んや人も一盛人の齡が
 花に似て咲は『遅くして散り易し』散り行く花は根に歸る木だにあ
 れば又來る春は枝に歸りて匂ひ來る鳥も古巢に歸るといへどそれ人間

は死して二度跡に歸らぬ死出の山古に如何なる人の蹈み初めて行くも
歸るも迷ひの深き泪川親の別れに子を連れず又子の別れに親添はず獨
り生れて獨り行く唯冥途の營を疑ふ心あらずして常に念佛を唱へなば
『是れこそ淨土の寶なれ』されば爰に一の譬あり似我と云ふ虫は如何
なれば已が姿になき虫を取りて我が巢に集めつゝ心盡して祈りなば我
れに似ることあるぞかし我等如きの迷ひの深き衆生もか程に深く願ひ
なばなぞか驗のなかるべき唯心の淨土已心の彌陀と聞く時は十萬億土
の極薬も爰を去ること遠からず皆人は此の理を知らずして罪を作るこ
そはかなけれ罪は來世の火の車『善は淨土の蓮なり』適々此の世に生

れ來て後生善所を願はずは誰も『淨土に浮ぶ瀬はなし』

○遠 矢

新田足利相挑みて未だ戦はざる處に本間孫四郎重氏苗瓦毛なる馬の太
く逞ましきに紅下濃の鎧着て只一騎和田御崎の波打際に馬打寄せて沖
なる方に向て『大音聲を揚げて申しけるは』將軍筑紫より御上洛候へ
ば定めて頼尾道の傾城共多く召具せられ候はん其の爲めに珍らしき御
肴一つ推て進せ候はん暫御待ち候へとゞふ儘に上差の流鏑矢を抜い
て羽の少し廣かりける鞍、前輪に當て搔直し二所藤の弓の握太なる

に○取○り○添○へ○小○松○の○蔭○に○馬○を○打○ち○寄○せ○て○波○の○上○な○る○鶉○の○巳○が○影○に○て○魚○を○
 驚○か○し○『○飛○び○下○る○程○を○ぞ○待○ち○た○り○け○る○』○敵○は○是○れ○を○見○て○射○放○し○た○ら○ん
 は○希○代○の○笑○ひ○哉○と○目○を○放○た○ず○御○方○は○是○れ○を○見○て○射○當○て○た○ら○ん○は○時○に○取
 て○の○名○譽○か○な○と○機○を○攻○め○て○ぞ○守○り○け○る○遙○か○に○高○く○飛○び○揚○り○た○る○鶉○波○の
 上○に○落○下○り○て○二○尺○ば○か○り○な○る○魚○を○キ○人○の○鱗○に○搦○ん○で○沖○の○方○へ○飛○び○行○け
 る○所○を○本○間○小○松○原○の○中○よ○り○馬○を○駆○け○出○し○追○様○に○成○て○懸○鳥○に○ぞ○射○た○り○け
 る○わ○ざ○と○生○な○が○ら○射○て○落○さ○ん○と○片○羽○が○ひ○を○射○り○て○直○中○を○ば○射○さ○り○け○る
 間○鏑○は○鳴○り○響○さ○て○大○内○介○が○舟○の○檣○に○立○ち○鶉○は○魚○を○搦○み○な○が○ら○大○友○が○舟
 の○屋○形○の○上○へ○ぞ○落○た○り○け○る○射○手○誰○と○は○知○ら○ぬ○ぞ○も○敵○の○船○七○十○餘○艘○に○は

舷○を○踏○ん○で○立○ち○並○び○御○方○の○官○軍○五○万○餘○騎○は○汀○に○馬○を○扣○へ○て○射○た○り
 く○と○感○ず○る○に○天○地○を○響○し○て○静○ま○り○得○ず○將○軍○是○れ○を○見○給○ひ○て○敵○我○が○弓
 の○程○を○見○せ○ん○と○此○の○鳥○を○射○つ○る○が○此○方○の○舟○の○中○へ○鳥○の○落○ち○た○る○は○御○方
 の○吉○事○と○覺○る○な○り○何○様○射○手○の○名○字○を○聞○か○ば○や○と○仰○せ○ら○れ○け○れ○ば○小○早○川
 七○郎○舟○の○舳○に○立○ち○出○で○類○少○な○く○見○所○有○て○も○遊○ば○さ○れ○つ○る○も○の○哉○借○て○も
 御○名○字○を○ば○何○と○申○し○候○や○ら○ん○承○り○候○ば○や○と○問○た○り○け○れ○ば○本○間○弓○杖○に○把
 り○て○其○の○身○人○數○な○ら○ぬ○も○の○に○候○へ○ば○名○乗○り○申○す○と○も○誰○か○御○存○じ○候○べ○き
 但○弓○矢○を○取○り○て○は○坂○東○八○箇○國○の○兵○の○中○に○は○名○を○知○り○た○る○者○も○御○座○候○ら
 ん○此○の○矢○に○て○名○字○を○は○御○覽○候○へ○と○云○て○三○人○張○り○に○十○五○束○三○伏○ゆ○ら○く

と引き渡し二引兩の旗立たる船をさして遠矢にぞ射たりける其の矢六町餘を越えて將軍の船に並びたる佐々木筑前守が船を籠中過ぎ通り屋形に乗りたる兵の鎧の草摺に裏をかゝせてぞ立たりける將軍此の矢やとり寄せ見給ふに相摸國の住人本間孫四郎重氏と『小刀の先にて書たりける』諸人此の矢を取り傳へ見て穴懼ろし如何なる不運の者か此の矢先きに廻つて死なんすらんと兼て胸おど冷しける本間孫四郎扇を揚げて沖の方を差招きて合戦の最中にて候へば矢一ツも惜しく存候其の矢此方へ射返してたび候へとぞ申しける將軍之れを聞給ひて味方に誰か『此の矢射返へしつべき者ある』と高武藏守に尋ね給ひければ師直

畏まりて本間が射て候はんずる遠矢を同じ所に射返し候はんずる者坂東勢の中には有べしとも存じ候はず誠にて候やらん佐々木筑前守顯信こそ西國一の精兵にて候なれ彼を召され仰せ附けられ候へかしと申しければ實にもとて佐々木をぞ呼ばれける』顯信召に隨て將軍の御前に参りたり將軍本間が矢を取り出して此の矢本の矢所に射返へされ候へと仰せられければ顯信畏て叶ひ難き由をぞ再三辞し申しける將軍強て仰せられける間辞するに處なうして已が船に立ち歸り緋緘の鎧に鍬形打たる甲の緒をしめ銀のつく打たる弓の反高なるを櫓にあて、きり々々と推張り船の舳先に立ち顯はれて弓の弦くひしめたる有様誠に

射つくべくぞ見へたりける斯る處に如何なる推參の馬鹿者にてか有けん讚岐勢の中より此矢一ツ受けて弓勢の程御覽せよと高らかに呼はる聲して鏑矢をぞ一ツ射たりける胸板に弦をや打たりけん元來小兵にやありけん其の矢二町までも射付ず『波の上にぞ落たりける』本間が後ろに扣へたる軍兵五万余騎同音に嗚呼射たりやと欺いてしばし笑ひも止ざりけり此の後は中々射てもよしなしとて『佐々木は遠矢を止てけり』

○甲斐殿道行

寝られぬ儘に思ひ立ち出づるぞ名殘三日月の『廻り逢んも定めなし』
 △△△△△△△△△△△△△△
 とは思へども又何の世の何の時にか君が面影をさて見る由も在りなん
 と未だ東雲に立ち出づる頃しも春の朝ぼらけ檣根に言問ふ鶯の啼音に
 花や散りぬらんさりとても花は春あらば又も昔にかへるべし二八の秋
 の紅葉こそ惜むに甲斐はなかりけれと思ひ准らへ行く程に浮世を廻る
 車町みどりの末もいと長き柳の町を行き過ぎてはや戸柱の橋の上より
 見渡せば出入る船は我が如く焦れて物や思ふらん甲斐なき戀を諏訪の
 山前は稻荷の後迫愛宕山をも右手に見て我が身の上は生殺したどり行
 くこそもの憂けれ命あらば又來の原と行く程に立寄る影もなご更に今

はなき世と業平の名許り残る涼松よしや芳野の花盛り君故見るこそは
かなけれ實にや宮捨人も花には何と隱家の五月は未來菖蒲谷東を遙か
に眺むれば名にも似ぬ鐘の聲なき山寺は戀する人の住家にて遠路の里
に立つ『煙是れこそ春の霞なれ』木隠れに行く道なれば人目の關屋忍
びつゝ心細くも通り山暫しとて人や立寄る柴の本是れより先は下り阪
逢坂などと名を云はゝたれ踏み初めし首途ぞと思ひ准らへ行く程に名
は白金の小石原真砂の數はつくるとも思ひはつきし何時までも限りも
知らぬ命哉と彼の明神を伏拜み南無や明神願はくは空吹風の音信に聞
及びにし與市様に露の命の消ぬ果ぬまに廻り逢はせ給へかしと深く祈

誓を申しつゝ見卸し見れば春霞棚びく雲の絶間より『遠山の櫻朗かに
見ぬし』

深山木の其の梢とは知らざりき

櫻は花に顯はれにけり

とよみし歌の頃にも相逢ふ春の空と打眺の脇元の宿をすぎ行けば絶ぬ
ず流るゝ思ひ川鶉鳴くなる餅田原行くにはてなき十日町左には南無藥
師流れの水も潔よし折節満潮に竿棹し渡す海士小船身も諸共に焦れ來
て『思ふ心の底深し』實にや忍ぶにも同じ心の人もなければ行方も知
らぬ有様を誰にか斯くと岩の原何かは君を松原の苔の細道ふみ別けて

思ふ加治木に着きにけり早や珍宗寺の鐘の聲君が在家や告げぬらん人の別れにやいとぐらん君の在家は常磐にて今三洲の萩原と尋ね行く門の邊に躊躇て與市様〱と問ひければさしも思ひし甲斐もなく折節他行なりしかば力なくして立ち歸る是れまで來る印とて門の扉に書きし〇〇其の文に曰く聞しにまさるくるがねのさびしき遠路を忍び是の所まで往來すと雖も不縁の第一にして逢ふことを得ず空しく歸る道すがら君に於ては恨みなし又何の時をか期せんと書き置きてはふて歸る道すがら與市様に擲節をはね懸けて謠ひ歸りし有様は見る目もいとゝあぢきなや心から心に物を思はせて『身を苦しむる我が身かな』

○胡蝶

春の心を身にしめて花より花とたづね行く胡蝶の様を見る我はかれが羽風のうちに在りあるは紅あるは青山吹色に照りかへす愛でたき彼れによそほひはいと時ごとに移りゆくわれは彼れにと親しめどかれは我れにと親しまでめぐりまはりの姫百合の花にとまりてやすやすとおゝ罪深し我ながら罪なき彼れは我が爲めに俘となりてたなぞこの中に浮世の夢や見ん思へば悲し春秋の深さまことの色見へしおのづからなる羽衣の色香はどこに行きたるぞ思へば迷ふかのつやの消ねしはいかに

世の中の契りの神は蝶と吾がふたりが中に宿らぬか

○國 船

雲に聳ゆる高山も登らばなごか越ぬざらん空を浸せる『海原も渡らば
終に渡るべし』我が秋津洲は茜さす東の海の離島譬へば海のたゝ中に
泛べる船にさも似たり二万方里の船の中四千餘万の乗組あり船の主の
指揮を受け『文明海に進め行く』水手楫取多かるに我等も楫子の一人
なり船の行くては和田の原八重の潮路の遠ければ颯逆巻く折もあり
『高波荒るゝ時もあり』船手の業に習はずば颯高波凌ぎ得て思ふ港にい

かて着くべき

○千代の春

かゝる目出度御代なれば國々諸所に至るまで千代の春千歳の『秋と樂
むも』これ皆君の恵みの深きゆへぞかしいよゝ君を仰ぎ奉る思ひお
もひの殿づくりにいからを並べ軒を列ね高殿樓閣を構へ旭の光り夕月の
影うつる光りの輝くは言もおろかに思はれて庭には金銀の砂石を敷き
四方の園はおびたし不老門を出入る人は皆袖をつらねて色はゆるこ
れや名に聞く天の羽衣『仙境の春の楽しみも斯くやあらん』かほと治

まる御代なれば吹く風までも枝を鳴らさずといへばまた人として君が
此の代を千代万代と祈らぬものはなかりけり

○花の香

世の中に梅は匂ひて櫻は色よそふしての後「人は情の下に住む」嶺の
小松もひとり立つとは申せども夜半の嵐はのがれがたなし富士や淺間
の嶽とても霧や霞に埋もれて三千世界に光りを照らす日月さへも雲の
鎖は如何せん況てや人間は五尺にたらぬ身をもちて一人立ちして世を
渡らんと思ふ人こそはかなけれ君は臣下を頼み臣下は又君を尊み奉る

親子兄弟夫妻の中又は朋友の交はりとても互に頼み頼まれて妹脊の中
にて世を渡らんと思ふ人こそ「是れが誠の人ならめ」吾關白にすぐる
身は風の前なる燈火にてはなけれども消ゆるに易き身を持って悪をたく
ひは地獄なり善を願ふはこれを極樂なる地水火風は娑婆の假もの死し
て冥土に赴けば我が物としては一物もなし釋迦も孔子も名のみ残して今
はなし達摩尊者の無一物説かれし事も實に理なりと知られたり左もあ
らば古へ花に増したる美人の數を算ふれば漢の李夫人唐の楊貴妃吾朝
にては二條后和泉式部に小野小町常磐御前と云はれし人も「死すれ
ば野邊の土となる」其の名も高尾の紅野野田の小藤吉野の櫻北野の梅

も盛りの程の名も高けれと散りての『後は色も香もなし』

○菊水の旗

名は芳しく万代にはまれを残す楠の君に仕へてまごゝろを盡さんもの
とさきがけて取られて取りし赤坂や心は堅き金剛の峯にかための城一
つ菊水の旗靡して軍の道の手だれ人と千歳にかほるもことはりや攻む
れば破ふり討てば勝ち賊のやからを夷げて再び照らす天津日も嵐のす
さびて黒雲の叢り起るそがために黑白もわかぬ世となりて奉りたる謀
計拒める者のありとしに心定めてなき後を櫻井驛に訓して雲かと思ふ

敵の兵霞と見ゆる賊の勢ヤヨ兵よ諸共に後ろな見せじと覺悟して事は
終れりいざさらばさらば弟よ今爰に命は露と消ゆるとも七度此の世に
あれ出でときよの爲めに敷島の大和心の光りある櫻の花の大丈夫も惜
しや八千代に香をとめて

○兒島高德

元弘二年如月の小雨しく笠置山あやめわかぬ夜の雨に指して行
くては楠木の蔭だに『見ぬ常闇に』荒れ渡りたる人面の心は鬼か蛇
の如き妖怪變化の賊共は恐れ多くも天皇の龍駕を西の隠岐の海路遙か

に移しけり其の有様は今も尙ほ史上に見ゆ身の毛もよだち胸さへも寸
 々にたへいる計り恨む目に古を脱む外どなし其の時兒島高德は衆を集
 めて申すやう仁になす爲め身を殺し義を見てせざるは勇なきなりと勵
 ます詞に勇む武士共々向ふ船坂の山の險阻は此れやこれ天の與へし要
 害と身を潜めつゝ堅睡のみ我れが天皇を奪はんと待つに甲斐なや鳳輦
 は早や山陰に向ひぬと聞くより早く松阪の樹の根岩の根踏み碎き望め
 ば又も鳳輦は遙かに過ぎて後影「僅かに拜むばかりなり」今を挫けし
 勇者の跡を見送りて高德は天を睨みつ地に哭じ姿をかへて身をやつし
 風の晨も雨の夜も厭はず御跡慕ひつゝ善き折あらば赤心を我が天皇に

聞ゆ上げ敬應を安んじ奉らんと氣は張り弓の撓まぬも守り厳しき板庇
 し障さへ洩らぬ龍姿にさし足抜き足日本刀櫻の老木かき削り墨手の墨
 の黒々と赤き心を書き下す

天莫空ニ句踐

時非無三范蠡

十字の文字は長城の堅き固めや勤王の記しも賊は明めくら群り見るも
 明烏阿房々々と笑ふのみ我が天皇の龍顔も最と麗はしく暫時の間愁ひ
 の御眉開さける斯の如くに高德が虎の穴だに恐れなき虎の子得んと思
 ひしに勳は後の世迄も輝き渡り曇りなき明治の御代に愛國の古さを
 温新らしく護りの神とたへらるゝ讀む人々よ心せよ彼も人なり我

れも人「食ふは今だに日の本の」實のる瑞穂なる飲むも昔も今も清き日
本の水部屈の腸洗ひ去り國を枕に誠忠の「樂しき夢や結ぶべき」

○若武者

心太くも夷等は君のめぐみをよそにして名も陸奥の金澤にたてこもり
たる程もなく討手の兵は忽ちに送り越されて一場の「修羅の巻を開か
る」矢合せなしつ敵味方山岳振ふ時の聲此の時味方の若武者になら
での鎌倉權五郎手柄を残すは今日なりと花々敷もいでたちて敵陣深く
乗り入る、敵はすぐれし若武者を心にくくや思ひけんねらひ違はぬ一

筋の征矢は左手の目に立てもされども勝に乗じたる彼の若武者は其の
矢の根抜くひまもなく弓射たる敵を目蒐けて追ひかけつさぬざる雑兵
拂ひ退け終に仇きを得たりけり此の城攻めに若武者が雄々しき舉動轟
きて今にその名も芳しく八幡太郎義家が後三年の戦の「中にすぐれて
たへらるる」

○面影

緑の樹々は色深めはたけの麥は黄ばむなり歌ふひばりの聲高く空に聞
ゆる面白や濁聲遠く馬士唄の賑の方になつかしや幼なかりけるおり

くは隣りの友だちさそひつゝ小魚をあさりし川筋も遊びに行きにし
岡の部も昔わすれぬおもかげにわれを迎ふるうれしさや

○千早振

紀貫之作

千早振る神の御代より吳竹の代々にも絶わすあまびこの音羽の山の春
霞思ひ亂れて五月雨の空もとろに小夜更けて山郭公なくことに誰れ
もねさめて唐錦立田の山の紅葉ばを見てのみ忍ぶ神無月しぐれくして
冬の夜の庭もはだれに降る雪の猶消に歸り年毎に時につれつゝ哀れて
ふ言をいひつゝ君をのみ千代にと祝ふ世の人の思ひ駿河の富士の根の

燃ゆる思ひのあかずして別るゝ涙ふぢ衣おれる心もやち草の言のはこ
とに皇王のおほせかしこみまさまさの中につくすと伊勢の海の浦の塩
がひ拾ひ集めとれりとすれと玉の緒のみぢかき心思ひあへず猶は新
玉の年を経て大宮にのみ久方の晝よる分かずつかふとてかへり見もせ
ぬ我が宿の忍草おふる板間あらみ降る春雨のもりやしぬらむ

○城山

勝海舟作

夫れ達人は大観す拔山蓋世の勇あるも榮枯は夢か幻か『大隅山の狩鞍
に真如の月の影清く』無念無想を觀ずらむ何を怒るかいかりをの俄か

に激する數千騎勇みに勇むはやり雄の騎虎の勢ひ一轍に留り難きも是非もなき唯身一つを打ち捨て、若殿原に報いなん明治十年の秋の末諸手の軍打ち破れ討ちつ打たれつ頓て散る霜の紅葉の紅の血汐に染めど願りみぬ薩摩武雄のをたけびに打散る彈丸は板屋打つ霰たばしる如くにて面をむけん方どなき木だまにひびく関の聲百の雷一時に落つるが如き有様を隆盛うち見ては、ぞ笑みあな勇ましの人々や亥の年以來やしなひし腕の力もためしみて心に残る事もなしさ諸共に塵の世を脱れ出んは此の時と唯一言を名残にて桐野村田を始めとし宗徒のともがら諸共に煙と消ぬしますすらをの「心の内こそ勇ましけれ」官軍之れ

を望み見て昨日は陸軍大將と仰がれ君の寵遇世の覺ぬたぐひなかりし英雄も今日はあへなく岩崎の山下露と消ぬはて、移れば替る世の中の無常を深く感じつゝ、無量の思ひ胸にみち唯悄然と隊伍を整へ目と目を見合すばかりなり折しもあれや吹き下す「城山松の夕嵐」岩間にむすぶ谷水の無常の聲も何となく悲鳴するかと聞きなされ「戎服の袖をぬらしそふらん」

○墨

繪

心とは何を言ふらん不思議さよ墨繪に書きし松風の音況んや此の世を

諸法實相と聞く時は峰の嵐も法の聲邪正一如と見るときは『迷も覺もなかりけり』万法一如と觀すれば谷の朽木の色佛さのみ不審はなかりけり三界に身を安からん小車の我が惡業に引かれ來て『錦の紐をいつか解くらん』四つの邪の一つの箱にたゝまれて何も苦しき貪欲も深き流れに身を沈め浮ぶ甲斐なき我が身一つを如何にせんそれ人間の習ひにて昨日の迷ひは今日の覺り昨日覺りし人とても明日は迷ひしこともあり人の上とてさのみ云ふては如何せん物の報ひは物毎にあり埋木に如何なる花か咲きぬらん實になりてこそ思ひ知らるれ皆人は時に至りてなげき悲しみ『袖に露おくばかりなり』兼て後世を思ひ知れ生は死

の本逢ふは別れの始めとは誰も言ふなる言の葉なれと昨日今日とは思はざりけん人には永く添はんもの只何事も腹は立てゝも言葉は殘せ千歳此の世に在る身の如く慳貪邪見は諸事無益僅か此の世の假の宿氣をあさあさと心寛くも能く持ちて法の道には誰も深かれ極樂の只一筋の道の理を誰に尋ねん佛ならねば知らしめされず佛とは何を岩間の苦衣只其の儘の姿にて慈悲より外に如く心いなし是につけても皆人は親子兄弟夫妻の中又は朋友の中とても此の世ばかりの契りなり死して行く身の野邊までは娑婆の情に我も誰もと供を致せども野邊より先は只一人今は冥途に赴かん『先立つものこそ哀れなれ』今日までは人を送り

て歸りしが何時か又我は送られて人を歸さん涙川幾瀬渡るも淵なれば
 御法の舟こそ戀しけれ』これに附ても老若男女に至る迄慈悲をも願へ
 慈悲は万行の功力によりて死しての後は極樂のすましき風にかへば
 『則心成佛疑ひなし』身は得達の縁となり唯人間のなげきの『中の悦び
 とどなる』

○王政復古

物集高見作

王政復古の當時を思へば過し慶應の三年の冬の十二月九日の日を初め
 にて都の空に立ち歸る春の光もかきくらす雪消の雲のたちまちに世は

荊菰と亂れつゝ山郭公なく頃の五月やみにはあらねどもあやめも分か
 ぬ墨染の鞍馬の山の山びこに響き動よめる大砲の音はさながら百雷の
 一時に落つる心地して驚き噪ぎ泣叫び老若男女逃げまよふ都の中はよ
 ながらに鼎の沸くに異ならず山ゆかば草むす骸海ゆかばみづく屍と言
 建て、身をかためたるつわもの、鎧の袖に輝くや星の位も三台の影薄
 れ行くさしぐしの曉やみに打出す火矢の煙に呉竹のふしみる見ねす白
 鳥の鳥羽も別れぬ折しもあれ空に輝く月と日の錦の御旗九重の大内山
 の山風に翻りつゝ公華御門打し開かせて出給ふ大將軍の仁和寺の宮の
 威風にあたりては靡かぬ草木もあらじとてふりかへり見る武夫が勇氣

も常に百倍し軍よばひもなる神の轟きわたる修羅の道切りつ斬られつ
阿鼻叫喚宮に従ふ參謀の其の面々は東久世烏丸を初とし矢守高崎中沼
等四條五條は旗奉行前後左右を打守り勤王諸藩銳兵が火花を散す一戦
は國の安危とかた唾呑む帷幕の中におく霜も血汐に染むる紅葉ばの丹
き心をとりくりに倒れ重る屍は敵か味方か彼は誰れ時踏みしだき行く
戦場の習ひ常なき露の身とかさす劔の柄の間も君を忘れぬ武士の道の
はてころ憐れなれ天地も動く震動に焰逆巻く淀の城見るく灰となり
果て空を掩ひし黒煙跡かたもなく消ぬうせて朝日のひかりあらはれぬ
七百年の昔より武門に落ちし政權を治め給ひて檀原の聖の御代の古に

復し給ひし大御代の長閑き春のよろこびの眉も開けてうちつとひ昔語
りと過ぎし世を語りつゝ酌む盞に老いたる影もかつ見ゆる『此の宴こ
そ目出度けれ此の宴こそ目出度けれ』

○戀の山

昔時に誰か踏み初し戀の山繁き小笹の露分けて今日もや『袖を濡すら
ん』斯る闇路は荒磯の濱の真砂の數はものかはと傳へ聞く陽成帝は二
八の春の華の頃心盡しの遠山を未だ見ぬ花にあてがれて勿体なくも王
宮を忍び出させ給ひつゝ野飼の手に吹く笛の音をのみ聞きて啼き給ふ

光る源氏は照りもせず曇りもはれぬ春の夜の朧月夜おぼろづきよに名を立て、身は憂うれき須摩すまのさすらひに調ふる琴の音にかよふ松の嵐をかたしきて結ばぬ夢のよもすがら袖こそ浪に浮き沈め借も短かき玉の緒の絶て其の名は内親王の御墓の石に延はひまどふ定家かづらの其の執心しゅうしんも猶も残りて在原の御手洗川みたらしかはにせし御秋みあき百夜通ひて一夜だに逢はずて遂に深草の「露つゆと消けわにし人もあり」霞かすみを食くひ氣を飲のみて不老門ふろうもんのうちにして飛行自在ひやうざいを身に得たる一角久米かくくみの仙人も亂れ心や九十九つくもせふ髪身は浮空うくうに鳴神も雲の絶間に落つとかや況してや凡夫ぼんぷに於ておや高麗唐土こまもろうどの戀友楚その驪山宮りざんぐうの私語言さしごころを誰か聞き傳へ今の世迄も残すらん戀ははてなき武藏

野の草の緑もなつかしや思ひまはせば小車せうくるまの我が悪業あくごふに引かれ来て身を苦しむる「此の迷まよひこそはかなけれ」中々に思ひこめまば紫むらさきの「濃こくも薄うすくも物は思はざらまじ」

○物もの 狂くるわい

風かぜに柳やなぎ乱れ心や狂くるわいふらん胸の炎が身を焦こがす恨めしの浮世かな「嗚呼恨めしの此の世かな」是こゝの里さとの心こゝろが性さがなくて谷の埋れ木うみれぎくちくちにいひ立てられて君と吾れ別れくくに鳴海なるみ鴻身がたの終りこそうたてけれ思ひ出づれば今は早や我が故郷こきやうに住家すみやなしいざさらば思ひ立田たての戀紅葉こひもみぢ夜

の嵐にさそはれて散々になる一葉の舟も焦れて出る水の面にうき波し
 げき身にしあれば或時は君を恨み又或る時は我が身を歎き心狂氣に馴
 衣身に餘りたる涙川深き流れに身を沈め浮ぶ甲斐なき『我が身ひとつ
 を如何にせん』時知りては花も涙や灌ぐらん鳥も別れを惜しみてぞ鳴
 く命の輕きことは只『飛花落葉の如くなり』君を思ふ心は常に是れ高
 山其の一念は五百生係念万行无量劫に至るまで恨みは君に盡くるまじ
 娑婆の務めも益はなし併し浮身を捨て果てんと思へども流石又輪廻の
 浪の立つまにも其の面影が身に添ひて片輪車の風情にて『遣る方もな
 き胸の中』今は路頭に憚らず泣きつ笑ひつ安からねば物狂ひとや『人

の云ふらん』

○月の 恋

新田左中將の首京都に着ければ『是れ朝敵の最武敵の雄なり』とて大
 路を渡して獄門に懸けらる此の人前朝の寵臣にて武功世に蒙らしめし
 かば天下の依頼として其の芳情を悦び其の恩顧を待つ人幾千万と云ふ
 數を知らず京中に相交りたれば車馬道に横はり男女岐に立ちて是れを
 見るに堪はず『泣き悲しむ聲吻々たり』中にも彼の北の臺勾當の内侍
 の局の悲しみを傳へ聞くこそあはれなれ此の女房は頭太夫行房の女に

て金屋の内に粧を閉ぢ鶏障の下に媚を深ふして二八の春の頃より内侍
 に召されて君主の傍に侍り綺羅にだも堪ぬさる貌は春の風一片の花を
 吹き散らすかと疑はる紅粉を事とせる顔は秋の雲半江の月を吐き出す
 に似たりされば椒房の卅六宮五雲の漸くに遶る事を所み禁漏の廿五聲
 一夜の正に長さ事を恨む去ぬる建武の始め天下又亂れんとせし時新田
 左中將常に召されて内裏の御警固にぞ候はれける或夜月凄まじく風冷
 かなるに此の勾當の内侍半簾を卷て瑟を彈じ給ひけり中將其の怨聲に
 心引れて覺はず禁庭の月に立ち吟ひあやなく心精にこがれてければ唐
 垣の傍に立紛れて伺ひけるを内侍見る人有と物詫しげにて瑟をば引

んずなんぬ夜痛く更けて有明の月隈なく差入れたるに類ひまでやはつ
 らからめと打詠じてしはれ臥したる景色の折らば落ちぬべき萩の露拾
 はい消ぬなん玉篋の霞より猶ほ仇なれば中將は行末も知らぬ道に迷ひ
 ぬる心地して歸る方もさだかならず淑景舎の傍に徘徊てと立明す朝よ
 り夙に歸りてもほのかなりし面影のみを爰もとに有心迷ひに世の態人
 の云通す事も心の外なれば今となく起もせず寝もせで夜を明し日を暮
 して若しるべする海士だにあらば忘草の生と云ふ浦の邊にも尋ね行な
 ましと『精に思ひ沈み給ふ』あまりにせん方なきまゝに媒すべき人を
 尋ね出してそよとばかりを知らすべき風の便りの下萩の穂に出るまで

はなく共とて

我袖の涙に宿る影とだに

しらで雲井の月やすむらん

と讀みて遣はされたりければ君の聞召されん事も憚り有りとして世に哀
げなる氣色に見ぬながら手にだに取ずと使歸りて語りければ中將いと
い思ひしほれて云ふべき方なく有を覺の命とも覺わすなりぬべきを何
人か奏しけん君等閑ならずと思召て夷心の分方なさに思ひ染めけるも
理なりと哀れなる事に思召されければ御遊の御次に左中將を召され御
酒たばせ給ひけるに「勾當の内侍をば此の盃に付けてとぞ仰出されけ

る』左中將限りなく忝けなしと悦びて翌の夜やがて牛車爽にし立て
角と案内させたるに内侍も早や此の年月の志に誘ふ水あらばと思ひけ
るにやさのみ更け過ぎぬ程に車の轆る音して中門に轆を差廻せば侍兒
獨り二人妻戸を差隠して驚破めさ合り中將は此の幾年を戀忍び相逢ふ
今の心の中優曇華の春待ち得たる心地して珊瑚の樹の上に陽台の夢長
く覺め連理の枝のはとりに驪山の花自ら濃かなりあやなく思ふ心の道
諫むる人もなかりしかば去ぬる建武の末に朝敵西海の波に漂ひし時も
中將此の内侍に暫しの別れを悲しみて征路に滞り後に山門臨幸の時寄
手大嶽より追落されて其の儘寄せば京をも落んとせしかども中將此の

内侍に迷ふて勝に乗り疲を攻むる戦を事とせず其の弊將して敵の爲めに國を奪はれたり誠に一たび笑ば能く國を傾くと古人のこれを驚めしも「理りなりとぞ覺へたる」

○灘

廻

頃は彌生の末つかた君が行方を尋ねんとあてぎが濱より舟に乗り漕ぎ出見れば南林寺の松の葉色は常磐山濱に塩たく夕煙烟は空に横消れて消れて跡なきはかなさよ洲崎に寄する白波は沖に名におふ櫻島腰地に伊達の雲の帯咲き亂れたる花衣「着て見ぬ人の心かや」所は祇園の

御社玉龍山の鐘の聲無明の夢をや覺ますらん吉野の里の遅櫻谷の戸出る鶯の初音ゆかしき時鳥波間に見ぬしおこが鳥友呼ぶ千鳥の數見ぬて名を告げ渡す鳥島いづれ嘆きの種子ならんあなたに高さ御山は愛宕山とはこれとかや筑間の神は御座せねと鍋の數焚く田之浦や大磯小磯うち過ぎて茲は險岨のな茅落三舟の明神を伏し拜み暫は茲にうかり舟浦ふく風に帆を揚げて君に大崎龍が水心岳寺をも打過ぎて茲は脇元上別府川加治木の里を詠むれば實にや名高き蛇王嶽嵐に花の數散りて流れて出づる黒川や七里小濱や長濱の眞砂の數は盡くるとも思ひは盡きといつまでか彌陀の浄土は八幡の宮居も茲に立せ給ひて常燈の光を輝か

し給ひけり捨て置かれぬ濱の市沖の小島の辨才天梢に傳ふ猿の聲沖に
 釣する漁火は恰夏の螢原櫓楫の音に驚き「沖の鷗も立騒ぐ」猶も小
 群の海士人が苦を敷寝の夢見だに音信もせぬ舟の中遠寺の鐘のつく
 と誘ふ嵐に福山の宮が浦にぞ着にける

○啞の夢

我が戀は啞の夢かや見てはたい語らで暮す因果なり思ひに餘る折節は
 門に立ち出で月をも詠め「花をもめでて慰まば」其の間なりとも打ち
 忘れ涙の雨も晴れやせん斯る嘆きの有様を何に譬へん片糸の逢はん契

りも徒らに何しに深く願ふらん有し昔の我が戀に似たるもあるや古歌
 にある

露の身にあはでや果てん片糸の

よるく毎に思ひのみする

と連らね置かれし言の葉が今身の上知られたり去らば津の國浪花の
 浦いくた川には戀故に身を捨て果し人もある柏木の右衛門督は女三の
 宮を戀ひ奉り「終に其の戀とげ給はねば富士の高峰と我が胸の煙競べ
 にあこがれて「終に戀ひ死に召されたり」猶も譬へば茲に又武藏國の
 住人熊谷の次郎直實は無官の太夫敦盛を詮方なくも手に掛けそれが一

期の思ひとなりて鎧の袖を墨に染め其の名を蓮生法師とよび様を替へ
 新黒谷に引籠り三とせがほとは終夜百万遍を唱へらる是も敦盛の最後
 の時一言の言葉の末におく露のきゑての後も武士の情もいとあるぞ
 かし譬へがたなき我が戀はあらはにもゆるものならば何と駿河の富士
 の山』淺間が嶽と言はれまじ『花もあだなる蜜牛の露の間なりと逢ふ
 ものならばなぞか』命のおしからん』

○王昭君

問はず語り誰れ聞けとてか打ちわふる身の憂さを知れ山郭公軒の草し

のぶとすれを秋更けて『よわりはてたる虫と我れ哉』夫れ一生の別れ
 は露の命も惜しからぬ只人間の一生は風前の燈火に似て消ゆるに安さ
 ものと思へば悲しみ骨髓に透りて貌は憔悴と衰るへて次第々々に妹脊
 の契りも麻衣の薄さぬにしと成り果て、哀れ果敢なき我が身かなひと
 たび君に別れてはふたゝひ相逢ふこともなきに隔て盡せし千山万水の
 苦も終夜心にかけて思へども君よ逢ふ夜の夢だにも見ず今世の中に物
 思ふ身は我等ばかりと思へども昔を傳へ聞く時は王昭君はいにしへの
 漢の帝の美人にて御寵愛は類なし誠に雲の上人にて殿上にても双びな
 しさしもゆゝしくおはせしが如何なる人の讒言にや胡國と云へる『遠

國の夷の朝に流れ給ふを哀なる』王昭君は今は早や住みなれし花の都
 を涙と共に立ち出づる或る時は舟に乗り又或る時は殊に險しき山を越
 へ餘り我が身の悲しさに馬の上にて琵琶をも弾じ古郷戀しき歌の曲さ
 まなく朗吟し給へば風聲水音盡く皆腸を斷つとかや帝も今はさこそ召
 され御愁歎の餘りには辱けなくも龍顏に御泪を浮べさせ給ふと申せど
 も綸言汗の如くにて再び召し歸さるゝ沙汰もなし彼は唐土是は我が朝
 又は胡國夷の朝春は藁屋の夜の雨乾坤万里と隔たれど物思ふ身は異な
 らぬ流れは同じ水なれど『淵瀨と替る如くなり』杜鵑血に啼て何ぞ腸
 を斷つとかやしはし口をむすびて『只三春を過さんにはよしなかりけ

り

○詩人の夢

夢をたづねて夢結ぶ詩人の夢はいづこなる『胡蝶ねむれる若草や』吉
 野の里の花ならず卯の花垣の月の袖小田の蛙の聲ならず月照るうてな
 玉すだれつゆの玉なす萩ならず越路の空の雪の朝小夜の千鳥の聲なら
 ず『いともあはれな暮の鎧』袖にかへして菅小笠八重の潮路のかりま
 くら夢迷ふなる旅ならず雨冷やかな鉄の窓隙洩る風は人の世のかなし
 き影をとぶらひて月の光の色青く幾多の蕙かなしみの魂をねかするひ

とやにぞ『詩人の夢はさまよはん』^{△△△△△△△△△△}方籟空に死をこめてあやしき影は
 ものすこく浮世の罪を身にしめて犠牲となりにし革命の血にむせびつ
 く夢に泣く人の恨みのうちにこそ『詩人の夢や迷ふらん』

○遠 近

遠近のたづさも知らぬ山中に覺束なくも呼子鳥の聲は聞けども鴟の
 『嘴の逢はぬ君かな』^{△△△△△△△△△△}いつぞやの頃掛けられし言葉の末が思ひとなりて
 忘れもやらで如何せん鳥は音に鳴き蟲は聲々花は色々咲き亂れても盛
 りの花ころ惜よるれ戀ひし文は見ぬこそよけれ心盡しの身は蛤には

あらねども『ふみとる度に濡る、袖かな』涙こそ戀しき人の形見とは
 なれ燥さじや袖の朽ぬとも五月の空の時鳥人こそ知らぬ鳴かぬ夜はな
 し古の賤の緒環くり返し昔を今に成すよしもがなと思へば昔はいと
 花盛り春ぞ戀しき鶯の梅の古本にまどろみて昔の花を夢に見るらん我
 が戀は深山隠れの岩躑躅荆棘か下のかきわらびをのれ畠の土筆思ひは
 すれど知る人なければ我が身ながらも『まつ菜とぞなる』

○小

督

高崎清風作

頃しも秋の半の空詠めがちなる御袖の泪の露をはらはせ給ひ宿直に侍

ふ彈正の大弼仲國を召されいかに仲國小督の行方を知りたるか」内裏
 を出でしより嵯峨のわたりに聊のしるべたよりて在りと聞く汝いかに
 もして尋ねいで、此の文傳へよとの仰せなり仲國つくづく思ふ様嵯峨
 のわたりとばかりにてあるとの名をだに知らざれば尋ねんやうはなけ
 れども小督の殿は世に知られたる琴の上手におはすれば今宵最中の月
 影に君の御上思し出でしらべ給はぬことよもあらじ兎にも角にも尋ね
 出で参らせて叡慮をやすめ奉んど心に思ひ定めつく畏りぬと聞てぬあ
 げ頼て御前をまかり出で寮の御馬に打乗りてくまなき月に鞭をあげ男
 鹿鳴くなる此の山里と詠じけん嵯峨野の奥にわけ入ればさらめさ渡る

白露に尾花が袖も打しめり鳴さかはしたる蟲の音に浮世の善悪も思は
 れて一人心をいためつゝ家ある毎に立ち寄りて「問へど知るもの絶て
 なし如何はせんと駒を立て惘然としてありつるがもし寶林寺にやおは
 すらんと龜山近くいたりしにしづがき遙かに聞えたり峯の嵐か松風か
 尋ぬる君が琴の音かとめつゝ行けば一群の松の影なる片折戸内に聞ゆ
 るつま音を手綱ゆらべてつくづくと聞けば誠や月花の御遊の庭に侍り
 て御笛つかうまつりし時聞き覺えつるしらべにて殊更曲は想夫戀偕は
 まぎれもあらまじとて腰より横笛をぬき出て少しばかりふきならし頼
 て駒より飛び下りて門をばとくと叩き开は仲國內裏より御使に参り

たり明けさせ給へ明けさせ給へと音なふに琴彈きさし静まりかへりて
音もなし良ありていたひけしたる小女房門をはそめに開けながら顔は
かりさし出してあやしの賤かふせ庵に内裏より御使など給はるべきに
あらず門違ひにや侍らんといふに仲國なまじひにいらへしては門鎖れ
んとおもひければ是非なく押明けて内に入り妻戸の椽に進み寄りなに
とてかゝる所には御渡り侍ふを君には明暮れ思ひしづませ給ひつや
く供御もさこしめさず打解け御寝も成らせ給はずほとく御命さへ
覺束なうこそ見ぬさせ給へれ斯く申すのみにてはうはの空にや思すら
んと御消息を參らすればあらなつかしの雲井やと御文顔にあて給ひ暫

し言葉も涙の雨にはれたる月も曇るらん仲國もそいろにせさくる涙を
おさへ兎角なぐさめ參らせつゝ表の衣絞るばかりに成りにけりやゝあ
りて御返りごと引結び女房の装束一重取りそろへ給はりければ肩に掛
け君にはさこそまらわびておはすらめ重ねて御迎ひには參るべしまた
せ給へと云ひ棄てゝ『駒を早やめて立ち歸り』有し次第を残りなく奏
する程にはのくと秋の長夜もわけにけり『秋の長夜も明けにけり』

○月と花

月と花とは昔より誰が楽しまぬ人やある誰が悦ばぬ人やある左は去り

ながら月花も心につれて憂草の種となるもの多からん足柄山の松風に
 吹き合せたる簫の音も是れより遠く奥州へ軍となれば身の末は死ぬる
 か生るか白河の關をば雲やへだつらん勿來の關の春の暮れ駒を止めて
 詠むれば都の空は花曇り鎧の袖に散りかゝる櫻の雪は將軍の鬢の霜よ
 う尙ほ白し戟の枕に夜は慣れて秋の哀れも知らざれと越山月のいと白
 く雲間を渡るかりがねも都の空へ歸るぞと思へば我もなつかしく花の
 都はわれはてし何處が我が身の置處ろ今宵一夜の宿頼む櫻の露も袖濡
 れて滅亡茲に極まりて『平家の末ぞ悲しけれ』佞人原の讒により諫の
 言葉容れられず二人ともなき賢人は筑紫の浦にわび住居御衣を拜して

涙なる心の底はいかならん十字を記す櫻木の我が赤心を申さんになど
 か多言を要すべき月の光や花の香や幾万年を経るとても更に變りはな
 きなるに常なもの世の治亂月を見て酔ひ花を見て眠れる春の手枕只
 一場の夢の間よ移る興廢存亡の世の成行を無常なれ去れば世間の諸人
 よ直心引き起し國の光を東海の月よりも尙ほ輝かし國の譽れをみよし
 野の花よりも尙ほ芳しくすること今勤めなれ誓て斯くもなせし後樂
 しき月見をしてみたや樂しき『花見をしてみたや』

○川 中 島

天文二十三年秋の半ばの頃かどよ上杉謙信は八千餘騎を従へて『川中島に打て出づ』我れ今度の戦は武田信玄を追ひ詰めて親しく雌雄を決せんとうづまき返す犀川を渡りて陣をぞ取りにける信玄は此の事聞くなり早やく二万餘騎にて打ち向ひ壘を堅めて戦かはす謙信は氣をいらち村上義清に言ひ合め日陰關山々の彼方此方に兵を伏せ木柵と似せし勇士を出して甲斐の陣營に近づかしむれば甲斐の兵謀事とは露しらす朝霧の間に追ひまくる待ち設けたる伏兵は時こそ來れど関をどつと揚げつゝ打ち向ひ袋に物を取るが如くに一騎も残さず打ち取りたり信玄怒りて軍を雲霞の如くに送り出せば謙信も備を立て、打ち向ひ入り乱

れ入り乱れ攻め戦ふ龍舞ふて雲を起し虎嘯ふきて風を呼ぶ破竹の如き勢に入り乱れ入り乱れ攻め戦ふ其の有様暴風巻きまき百雷岩を突くに似たり越後の軍退けば甲斐の軍之れを追ひ甲斐の軍退けば越後の軍之れを追ふ其の兵を合すること十七度何れを勝と知らま弓信玄は一手の勢の旗を伏せ河を渡りて葦の草の此の間に潜ませ謙信の旗幟近々進よりおもてもふらず切て入る謙信の麾下の兵は思はぬ敵に襲はれて走る後ろより甲斐の勢関をつくつて追ひかくる宇佐美定行これを見て虎狼の如く怒り我が兵に下知をなし敵の横間より無二無三に突き入りて淵瀨も言はさず追ひ落す信玄は度を失ひ流れを乱して逃げる後ろより謙信

唯一騎赤栗毛の逞ましさに鞭をめて何處まで逃ぐるかと云ひも敢へす
切り付くる信玄は之れを援ふ暇なく軍扇にて受けたれど扇は二つに割
れたり

降ると見て傘とる暇もなかりける

川中島のいふだちのあめ

早や二の太刀は信玄の肩先に切り込ぬあつと云ふ間に信玄の命は岩に
とくだけ泡と消ぬなんあやふきを救はんとすれど水瀬早やくして近よ
れず部將原大隅鎗を揚げ只一突とつきはしたれどあだつさぬ斯くては
叶ふまじと只一打ちとなしたれど馬に當りて馬逸す謙信は馬を静めん

と手綱かいとる其の際に信玄は虎口を逃れて去りにける

鞭聲蕭々夜河渡

遺恨十年磨一劍

曉見千兵擁大牙

流星光底逸長蛇

斯の如く信玄を打ち洩したる謙信の心の中は如何ならん『思ひやるだ
に哀れなり』信玄は肩の痛みに堪ぬかねて其の夜の中に軍勢をまとめ
て歸る月影の道をもとめてはるく〜と我が故郷に歸りける『我が故郷
に歸りける』

○熊本籠城

西も東も皆敵ぞ南も北も亦敵ぞ寄せ来る敵は不知火の筑紫のはての薩
摩がた世にも名高き猛士のたけり狂ふて攻め來り西九州に名も高き
『熊本城をば圍みける』敵の總督隆盛は古今無双の豪傑で之れに従ふ
大將は桐野篠原村田など中にも逸見十郎太慥悍決死の烈丈夫其の外兵
士二三万いづれ劣らぬ薩摩武士進み撃ち出す砲聲は天地も崩るゝばか
りなり天地は崩れ山かはは裂けるためしはあればとて動かぬものは君
が御代城の中なる官軍は忠義の旗をふりかざし死を見る歸する如くに
て唯一筋國の爲め進み進んで防戦す過ぎし普佛の戦にメツツの城の降
りしは長く青史を汚したり夫れにはあらで城中は千早の城の楠公か青

陽城の張巡か谷少將を始めとし下も兵卒に至るまで家をも身をも打ち
忘れ一心不亂に防戦す其の時都の方よりは錦の御旗ひるがへし多くの
官軍出陣すされども城の聯絡は空飛ぶ鳥のそれならで翼なければ通ひ
得ず城中城外諸共に音信するよしなかりけり折柄猛き若者が國の爲め
とて健氣にも單身劍を提げて城を出でつゝ夜に乗じ蟻のはいづる穴も
なき重圍の中を潜り出で都の軍に身を投じ城の中なる有様を語りつ問
ひつ謀し合ひ賊共原を打ち破り爰に始めて聯絡の解けて嬉しき厚氷池
中の魚も時を得て跳る心の活潑地進めくの號令に万銃天地に鳴り響
き西北南東なる一圍みの城を撃ち攘ひ一空前絶後の功を立て名を揚

げ父母を願はせし我が日の本の大丈夫を「譽め羨やまぬものぞなき」

○譽れの駒

常盤かきはのどこしへに八千代をかけて深緑吹く木がらし置く霜に色も變らば目出度さを『今日此の頃はいかにして』縁の色は衰へつ枯れもやせんと思ひしは實に道理を幾月日雨降ることのあらずして耕す業はやすからず植ゑにしものは枯れ果て日照り續きかなしきは飢て倒るを待つのみぞ何れの里も『雨乞を尊き神に祈りける』御験ありてか小夜更けて松の梢を誘ひ來る風につれて聚雨喜び祝ふ民草の萌ゑ出で

なんとことぶける一日二日を過ぐる間に幾重と厚き叢雲はうたてやうれひの種となり朝起き出ては空を見つ又もや今日も降り續く事よとつふやき暮しけり果せる事や國々の小河の水みなぎりつ大河となりて時の間に堅き堤も破らるゝ中にも時の將軍の牙城を建てし大江戸の東境を横される隅田河原のすさまじさ書にさへ寫せぬ有様を聞ぬあげけり將軍に家光公は聞き召し猶豫ならじと近臣を打ち従へて御櫓に登りて遙かに見渡せば聞きしにまさる有様ぞ渦まく水はわかぬとも小家の流れるくらし儲ては多くの人々の命の際の一大事いさや自ら乗り出で、危き民を助けんと其の旨仰せ出さるゝ『實に將軍の御成こそ』尊

き事とて常の日は幾日前より道筋の警護にいといとそがはし左るを此
 の日は軽々と多くの衛士も従へず俄かに川原に出ましの程過ぎてより
 重臣も従ふ如き次第なり床几にかゝりて指揮したる征夷將軍家光の威
 望、特に尊くて流され來る婦女子も梓弓と年老し翁も多く助けられ
 救はるゝもの數しらす斯るはげしき時さへも武勇にはやる武士の道に
 かしこき將軍は治に居て乱を忘るなど聖の言の葉思ひ出つ黒みに濁り
 て恐ろしき『此の水勢に駒をかり』渡せところは仰せられ左右の臣を
 見返らる去れども君の仰せをば畏こみまつりて我れ先きに駒乗り入れ
 て功名のさがかけせんず者あらじ皆々顔を見合じつ早瀬を見てはため

らひて答へまつれる者ぞなき將軍之れを見そなはし汝等いかに予が命
 を背きて渡すものなきか昔し源氏の侍に譽れも高さ高綱や景季ばらは
 宇治川に駒を競ひて敵軍を破りしためしあらずやは或は近江の湖を乗
 切る武者もあらずやは世の太平に慣れそめて弓弦の音のひゝかずば太
 刀ぬく術も自から忘れやすらん汝等のかよはき心は武士の數には入ら
 ぬものぞかしサラバいましら戰場に臨みし時は如何ならん矢叫びの聲
 銃の音聞きなばいかに汝等は魂消るばかり驚かん予が言の葉を守らざ
 る卑怯のやからがいましめの鑑に自ら乗入れて世の太平になれくし
 侍共のねむりをばさましくれんどのたまへり傍の人々驚きてこは危ふ

かり我が君と駒の手綱に縋りつゝ諫むる臣もありつれとらばと云ひ
 て此の儘に思ひ止まる君ならし放せと鞭を上げ給ひ終には諫むる忠臣
 の面を打てどいかにく一度び手綱を放ちなば君は逆巻く水底の藻屑
 と消ぬんよしやまた神の御助けあるとても尊き御身を傷は如何なる
 事や生せんと放せと打てど放さじと手綱にすがるせどきはに『誰とは
 知らず水上より』か黒き駒を乗り入れて浪のまにく漂よひつさしも
 烈しき水勢を美事に駒をあやなして覺悟極めし猛者ありき將軍馬上に
 見そなはし心の内にうなづきて駒乗り返し人々よ彼のますらをの姓名
 を尋ねよとこそそのたまへる折しも再び水音し先きなる駒よつゝかんと

洞まさかへすをおそれずに進める騎馬の勇ましき家光笑を含みつゝ待
 つ間程なく大丈夫の二人の名をぞ聞ぬあぐ先なる駒は阿部豊後後ろの
 駒は郎黨の『中にすぐれし彈衛なり』

一段

誠忠無二の大丈夫の心も惜しや通せざるいたましきこと昔より數のた
 めしはあるなるれ隅田の早瀬に乗り入れて武士の鑑こいましめ人の
 眠りをさましたる阿部の豊後忠秋は去年の春より將軍の勘氣を受けし
 事あるがこは忠秋のいさぎよき心に君の勤みを助けまゐらしせんもの

と「思ひし事も水の泡」不興を蒙る是非な事も日々の出仕は怠らず君
 の御爲めと盡せども御言葉さへも唯一度仰せられざるのみならず豊後
 を見ては顔をむけ例日も御景色荒らかに變らせ給ふを見るにつけ斯く
 ては近習に侍るさへ心苦しき限りとて自づと人にもうとまれつ光る黄
 金も時を得て益々深く土中に埋もるさまに似たる故今は生甲斐なきの
 みか心づくしもうたかたと消ぬて「敢果なき浮世かな」刀の手前武士
 の意地只潔さよく腹さりて我がまごゝろを君前に聞ぬあげんと幾度か
 思ふ心を老臣の平田彈衛に止められ勵まされては自らも思ひかへしつ
 ながらへと去る菊月は菊の香の武士の譽れの赤心を歌に咏じて奉る多

くはべれる侍の中にも一人忠秋が心の裡を將軍の御感に入れど如何に
 せん未だ忠秋の咏まれたる太和歌てう事をしもしろしめさずやありつ
 らん誰ぞ咏まれしと御尋ねに歌の主こそ阿部豊後忠秋なりと近臣の申
 し上ぐるに家光公笑ひまし給ひしかんばせも忽ちかはりて御座を立つ
 こは如何にぞと老臣も「取り付く鳥もなかりけり」豊後は獨り茫然と
 寄るべなきさの捨小舟ちやいも絶ぬつかぢかれつ浪のまにまに漂ふは
 武士と生れし恥なるれ思ひ極めて死んずと今日や覺悟を死出の山よし
 や彼の世に旅立つも魂魄此の土に止まりて君を守らん志、義の道は忘
 れじと彈衛を呼びて事つばら説きて靜かに腹切らん眞の武士の道をし

も踏みてや行かん西方に頼むは彌陀の利劍より國と君とのことぶきは
 幾千代かけて榮ゑませ万代かけて祈りつゝ今や憾は更になし老臣彈衛
 も諫むべき言の葉なけれと誠忠を天も憐れと思しけん平田彈衛が胸の
 中浮み出たる諫め言捨つべき命をながらへてもしや大事と聞しとき馬
 前に於ていさぎよく腹切る事は如何にやと『涙は手に説き出す』時し
 も三代將軍の股肱の臣と頼まるゝ重き臣より添へ言葉ありしことゝて
 忠秋も死せしと思ふ覺悟から如何なる難きことあるも耐に忍ばれんこ
 とやある死するの事は一旦に易きことにてありつれと生さながらへて
 君前に勳立つるは難きぞと吾れと心をひるがへしこれより後はかけな

がら君の御身に恙く御代太平に治まれと『祈るの外ぞなかりし』が數
 の月日を経るるまゝに變るは人の心なれと變らで盡す忠臣の心は天照
 大神のしろしめしけん洪水は幸か不幸か忠秋が命を捨つる晴れの場と
 『修羅の卷を欺ける』此の大水に駒を入れ君の自から渡さんと思ひつ
 めたる一刹那自ら駒を乗り入れり水音たかく響きつゝ主を思ふて生き
 死を共に白髮の老武者か死出の曠れとて畢生の勇氣をこれし駒のせな
 大波なりと寄せば寄せ逆巻く水勢も眼にはなし命をまことの主従ははや
 中央まで進みつゝ此方の岸よりながむれば浮つ沈みつゝ浮つあたら
 勇士を水の爲め一人ならず二人まで『失ふ事を口惜しき』扶けの船を

出せよ、や扶けの舟をいさ早く、出せと君命の厚き仰せをかしこみて
大船小船こぎ出せと「宛然似たり木の葉ふね」

三 段

駒を御するの術あるも心にそれぞと極めたる心なければいかでかはみ
なざる水に乗切りて「彼方の岸に達すべき」豊後は死するの覺悟なり
彈衛は生きて生ひ先きの余命をつながん心なし主従迭みに言はねども
死するの外はあらじぞと思へば難きこともなく嬉しや豊後はやうやく
に彼方の岸に登りけり勞れし駒をいたはりて後の方を見返へれば只吾

れのみと思ひさに續ける武者の又一騎ゆかしき名をば尋ねんと近づ
まよによく見れば「老臣平田彈衛なり」老の氣丈に忠秋が先途を見ん
どて續きしか吾が身を大事と主従の三世の縁あるぞとは彼れが如きを
云ふならめ持つべきものは忠臣と己が心にたくらべつ思はず知らず
大丈夫が「落す涙ぞいぢらし」彈衛はやがて陸をさし上りて豊後忠
秋の御前に頭をうなだれつ物言ひたげに見ゆめれと先き立つ老の涙こ
ゝ間はでも著るし忠秋が目出度早瀬を乗り切りし祝さいふにぞありし
なる忠秋彈衛が手を取りて暫し言葉もあらざれど彼方を信と見返れば
將軍始め近習等の扇を揚げて乗り返せ再び駒を乗り入れて此方の岸に

來られよいへるが如きさまなりき此の事見たる主従は「いかでかいで
 ためらはん」死するは元より覺悟なり駒も勞れて見ゆれども哀れや主
 が亡き命覺悟しつるを悟りてん水勢を恐れずあやなせるまゝにぞ向ふ
 嬉しさと駒のたつかみかいなでて再び彼方に渡らんと人にももの言ふ如
 くにて諭せば駒もいばぬつゝ勇氣を示すに似たりけりさらばと云ひて
 見返りつ續けや彈衛鐵石の矢竹心の徹らざるためしは未だ聞ざりし只
 傷はしきは老先の短かさいましを苦しめてわれど生死を共にする此事
 のみぞ悲しける救せよ彈衛としばたゝく涙を臉に拂ひつゝ言へば彈衛
 は殊更に主をばげます言の葉は猛く聞ふとおのづから嬉しき今はの仰

せをはいかでか争で忘れじと「語りし末は涙なり」彼方の岸には此の
 事を知るや知らずや招きつゝ扇をあけて呼ぶさまは歸り來れと聞わた
 り必死の覺悟にいざ彈衛續けと鞭を揚げければ應と彈衛も諸聲を「合
 はせて川に乗り入れり」將軍之れを見そなはし二つの駒をかり入れし
 彼等勇士の心こそ必ず死なん心なれ助けの船はあらざるか先きに出せ
 し船人は如何にやしけんちりくと云ひ甲斐なくも流されて命の瀬戸
 際東の間の爲めにはあらし今一度船こぎ出せよとくくと烈しき下知
 に船人は必死と川瀬を横切りて「豊後が駒よよせにけり」上意に候此
 の船に乗りて彼方に渡されよ上意なるぞよ上意ぞよ呼べば忠秋見返り

て彈衛にそれと目くばせし尊き上じやうにありつれを馬上ばじやうに河を横切らん
 覺悟かくごを今更らひるがへすこれぞまことの武士ぶしの身を終るまではづかし
 彼方に渡して恙なき運命あらば其の時に厚き情けに報はなむ只此の
 儘にと主従は遙かの手手を打渡り難なく陸に上りけり『主従とも恙な
 く』されども彼は倒れたり嬉しきあまりくるかねの心もゆるみし故な
 るカ倒れたれども介抱かいほうの厚あつき醫師いしに助けられ彈衛諸共君前に進み出で
 けり目出度くも君も豊後が忠心を嬉しき事におぼされつ數の月日をす
 げなくも困くるしのたりしいたはしさ今日の手柄てがらをまのあたりしろしめし
 れる將軍は心の誠目まごこに涙誠まごこの武士ぶしと後の世に傳へらるべき忠臣は阿部

豊後忠秋と平田彈衛の主従ぞ斯くまで赤きまごころを盡さんものとの
 忠臣は類たぐひまれなり五万石武士ぶしの鑑かみと賜りて彈衛も厚あつき御言葉ごごんげを『陪ばい
 臣しんながらも下しけり』其のいさはしは今の世も駒止橋こまどめばしと名も高く往ゆき
 かふ人も古いにしへを『思ひ出つゝ忍ばれん』

○粟津あはの露つゆ

吉原重隆作

名將めいしやうの下もとに弱卒じやくそつなしと信まごこなるかな此の言や木曾左馬頭きそざまがしら義仲は平家の軍
 を追ひ落し頓やがて都みやこに入り替かり勢いきほひ旭あさひの登る如くよろづ我が儘ままに働はたらけは
 相従ふもの等京中諸所きやうちゆうしよに打ち散りて金銀財寶きんぎんざいほうを奪うばひ取るそのみなら

ず恐れ多くも法皇を五條の御所に押込め参らせ四十九人の官職を奪ひ
 百官有志の進退もおのがまに〜行ひつ乱暴大方ならぬよし追々鎌倉
 にぞ聞わける頃は元暦元年正月十三日右兵衛佐頼朝は木曾が狼藉鎮め
 んと舍弟蒲冠者範頼を追手の大將とし九郎義経を搦手の大將として鎌
 倉を出發せしめらる範頼に従ふ輩は武田太郎信義加々美遠光一條次郎
 板垣二郎小笠原次郎を初めとして千葉常胤和田義盛稻毛、榛谷、金子
 猪俣、蘆名、高山等都合其の勢三万五千餘騎義経に隨ふ人々は安田遠
 江守義定大内太郎維義田代冠者信綱畠山次郎土肥次郎其の他佐々木兄
 弟梶原父子、熊谷、平山、佐藤、伊勢、武藏坊辨慶等都合其の勢二万

五千餘騎尾張の熱田に勢揃ひして宇治と瀬多へぞ向ひける爰に佐々木
 四郎高綱は惣勢出發の日に後れ鎌倉殿へ參上し御暇申して罷り出づ頼
 朝佐々木を呼び返へして云はるゝやう今度木曾追討の軍には定めて宇
 治瀬多の橋をひくべきなり其の方近江生立ちの事にしあれば川の案内
 知りつらん宇治川の先陣仕り候へとて生月といふ名馬をぞ賜ひける高
 綱畏まりて頂戴しかゝる御恵みに逢ひ奉ること生涯の面目此の上なし
 今度の軍佐々木討死と聞召され候は、川の先陣人に越さると思し召せ
 また生きて在りと御聞あらば先陣仕りぬと思し召されよとて其の儘御
 前を立ち出でけり茲に又梶原源太景季は今度拜領申したる摺墨と云ふ

逸物を黒装束に仕立てさせ舍人八人に塗かせつゝ駿河の國なる浮島が
 原にぞ着にける是所にて小高き處に打ち上り暫くして人々の牽かせし
 馬を見てあるに蒲殿の月の輪九郎殿の青海波和田義盛の白波偕は又畠
 山の秩父鹿毛等を始めとして大名小名思ひくゝの鞍置て幾千万と數知
 らず斯る中にも景季が摺墨程の駿馬は更らになかりけり景季あまりの
 嬉しさに金子十郎を打招き頻りに誇りて在る處佐々木が月勇みに勇
 み立ち鞍も飛ぶほど躍りつゝ再び三たび嘶きける聲は恰ら鐘を撞くが
 如くにて二里の路を隔てたる田子の浦まで響きけり畠山重忠言ひける
 は今の嘶きは生月が聲なり半澤六郎聞さどがめかばかり多き勢の中の

かで生月にかざるべき生月は蒲殿梶原殿御所望あるにも許されざりし
 を誰人にか賜ひ候はん重忠かさねて云ひけるはよも聞きは違へじ一定
 生月が聲なりと云ふ間程なく生月を舍人六人にて率來る梶原景季之れ
 を見て郎黨等を以て尋ぬるに佐々木殿の馬に候と舍人は答へて打過る
 源太不審はれやらす三郎殿に候か四郎殿に候かと再び尋ね問はずるに
 四郎殿とぞ答へける源太之れを聞くや否や口惜さやる方なし再三所望
 申しても御許しなかりし生月を高綱に賜ふ遺恨さよ大將たる其の人の
 大事を前に置きながら偏頗せらるゝ事やある是程の御景色にて有らん
 には千代榮ゆべき世の中ならず思へば雷光朝露の如し終に死なんは同

じこと日頃佐々木に宿意しゆくいなけれを時に取ての敵かたきなり差違さしちがひへ死すべしと
 思ひ詰つめ今や〜と相待あひまちちけりかくとも知らぬ高綱は手の郎黨らうたう十七騎
 相從あひまへて出来る源太纏げんたいぢんて言葉をかけ如何に佐々木殿生月は下し給ひて
 候ふにやと問ひかくる高綱きつと思ふやうまことやこの人生月所望しんじつしやうぼうし
 つるよし高綱拜領はいりやう申せりと實を以て言ふならば刺違さしちがひへんは必定ひつてうなりす
 かして見みんと思ひつゝ莞爾わんじと笑ひて申しけるは此の間久しく見参けんさんらせ
 ず仰せの如く生月を牽ひさて候ふこと不審ふしんに思し召されん承れば蒲殿も
 貴殿も御所望ありしに下されずと聞きつれば高綱如きが乞ひたりとも
 逆さかも許されはなき事と思ひ御厩みうまやの小平次を相語らひて盗ぬすみ出して候ふ

なり今にも鎌倉より御勘氣ごかんきの御使おんつかひや來ると唯管たひすちに胸むねを冷ひやす處なりとさ
 あらぬ体ていにぞ答へける景季案かげきあんに相違さういして實じつにも容易たやすく盗み出し給へる
 ものかな其そのの義ぎならば某も盗むべかりしものをとて打ち笑ひつゝ諸共もろもろ
 に馬を駢ならべて打ちにけり

二 段だん

さる程に義經の二万五千餘騎川端かはたに臨のぞみて見渡せば敵は川岸に搔楯かいてか
 いて矢尻やじりを揃そろへて待ちかけたり川の中には乱杭らんぐい逆茂木さかき隙すきなく打て大綱おほづな
 小綱こづなを流しかけ時しも雪消ゆきけの頃なれば水深くして流れ早くいつこを網

らん様もなし本陣評議の最中に畠山次郎重忠進み出で某瀬踏して御目
 に懸けんとして手勢引具し五百餘騎馬の鼻を並ぶる所平山季重佐々木太
 郎澁谷重佐熊谷親子宇治の橋桁打ち渡り早や戦を始めたり是れに引き
 違へて佐々木四郎高綱梶原源太景季は平等院の小島が崎へ打ち向ひ馬
 を飛ばして打て出づ梶原其の日の装束は木蘭地の直垂に黒革絨の鎧着
 て三枚兜の緒をしめ重藤の弓を持ち小中黒の矢負ひ鍊鏢の太刀佩いて
 鎌倉殿より賜りたる摺墨の名馬に黒塗の鞍置てぞ乗たりける高綱が装
 束は褐の直垂に小櫻を黄に返したる鎧に鉄影打たる兜の緒をしめ笛藤
 の弓の真中取り二十四回指したる石打の征矢頭高に負ひ噴物作の太刀

帯て是も鎌倉殿より賜りたる生月と云へる名馬に黄覆綸の鞍置て乗た
 りけり景季今年三十三歳高綱二十五歳にて我れ後れじと馳せ向ふ勢ひ
 龍虎に異ならず源太一反ばかり先なるを佐々木あとより詞を懸けいか
 に梶原殿此の川は五畿内一の大川なり御馬の腹帯の延びて見ゆるぞや
 と呼ばれば源太さてはと思ひて手綱を控へ弓絃を口に銜へて立上り腹
 帯を解きて引締めく締直す其の隙に高綱驅抜けて川へ颯と打入たり
 源太たばかられぬと安からず思ひ續ひて打入たりいかに佐々木殿高名
 せんとして不覺なし給ひぞ水の底には大綱を張りたり心得給へと呼はれ
 ば佐々木さもあらんと思ひ太刀引き抜きて馬の足に懸る大繩小繩三筋

ばかりも切りて流す宇治川流れ迅しといへども名馬に乗たることなれば眞一文字に打渡り向ひの岸に打ち上り燈踏張り弓杖つきて佐々木の四郎高綱宇治川の先陣と大音あげて名乗りしは天晴れ勇者と見ゆたりけり源太か乗たる摺墨は水にせかれて流れ渡りになりければ遙かの下に打ち上りぬ佐々木は即て使を馳せ先陣の様鎌倉へ注進す梶原も先陣とぞ注しける鎌倉殿使に對し佐々木梶原生きてありやと問はせ給へば何も生きて罷り在りとぞ答へける其の後の注進に佐々木先陣とぞ記されける武士の八十氏河のいちはやき手並の程こそ見ゆにけれ

三 段

あはれひべし旭將軍とさへ呼れたる木曾左馬頭義仲が軍勢は頼み切たる切所の川難なく敵に涉られて二万五千餘騎諸方より同時に打て懸り来る味方は僅かに五百餘騎いづこを防がん様もなく心ならずも押立てられ小幡の邊まで引き退け大將根井大矢太行親も矢種は残らず窮盡して必死となりて戦ひしがとてもせん術なき儘に都を差して落ち行けば義經押鼓をうたせ潮の湧くが如く次第を乱さず小幡山深草すぎてはや既に都の中へ亂れ入る斯る處に木曾左馬頭義仲は赤地の錦の直垂に紅

の衣きぬを襲かさね紫系むらさきいし絨じゆの鎧よろひ着きて石打いしうちの征矢せいやを負おひ百騎ひゃくきばかりを前後ぜんごに備そなへ
 て五條ごじょうを東六條河原とうりくじょうがはらに打うちて出でづれば根井ねのゐ楯たてが率ひきゐたる二百餘騎にひゃくじゆきに行合ゆきあ
 ひたり主從しゆじゆ三百餘騎さんひゃくじゆき轡くつろを並ならべて見渡みわたせば七條八條しちじょうはちじょうの河原がはらより法性寺柳ほうじやうじやなぎ
 原はら東山とうざんまで押廻おしまはし白旗しろはた一面いっぺんにたなびきて此方こなたに向むかて進すすみ來きる義仲馬よしのまの
 頭かぶを立直たてちし眞一文字まもんじに驅入かひいつて畠山はたけやまが陣じんを始はめと！梶原かぢがはら澁谷しぶや其そのの外ほかの敵てき
 の備よを打うちち破やぶり尙なほも進すすみて義經よしつねの一万餘騎いちまんじゆきの本陣ほんじんに面おももふらず驅入かひいり
 て火花ひはなを散ちして戰いくさひたり敵てきは目めにあまる大軍たいぐんなり味方あじかたは次第ついでに勞つかれは
 て纒りづか十三騎じゆんさんきに討成うちなれ四天王てんわうと聞きけたる根井ねのゐも楯たても討死うちじす義仲よしのも左右さゆうの
 眉まゆの上うへ鉢付はつづきの板いたに二筋にすぢの矢やを射付やけられ川原がはらを上のぼりに引揚ひきあげて追來おひる敵てき

を打うちち靡なげ遮さへる備よへを切破きりやぶり四よの宮川みやがわ原はら神無かみなしの社やしろ關せきの明神めいじん打うちち過すぎて
 大津おほつの在ざい家けを行ゆく程ほどに僅わずか七騎しちきになりなりにけり茲こゝに今井いまい四郎しろうが向むかひたる勢せい
 田たの備よへも破やぶられて敵てきの大勢たいせい四方しやうほうより雲霞うんかの如ごとく攻せめ來きれば或あるは討うたれ
 或あるは落失おちうせ皆散みなさん々に成なり果はて、兼平かねへい今は詮方せんかたなく粟津あつづの松原まつばらまで只ただ一
 騎馬きまを早はやめて馳はせ來きり義仲よしのにぞ行逢ゆきあひける義仲よしの悦よろこび兼平かねへいが手てを取とりて申まを
 さるゝは都みやこにていかにもなるべかりしを此處こゝまで來きつる甲斐かひありてあ
 ひ見る事ことの嬉うれしさよ去さらば兵へいを集あつめよとて兼平かねへいが旗押はたおした立て暫時せんじ控ひかゑて
 待まちつ程ほどに此處こゝ彼處かたこより集あつりて五百餘騎ごひゃくじゆきにぞなりにける義仲よしの喜よろこび魚鱗ぎよりんに
 備よへ千葉ちやうべ父子ふし、河越かがし、金子猪俣かねこじゆま其そのの外ほか甲斐かひ源氏げんじ武田ぶた、加々美かがみ、一條いちじょう等

近づく備へに驅向ひ命を限りに戦ひしが遂にまた六騎にうちなされ今はかうとぞ見わにける茲に義仲の妾巴といふは樋口今井が妹にて歳は今年二十五色白く髪長く眉目形美麗にて力量殊に人に勝れ度々の軍に大將として一度も不覺の名を取らず僅に六騎になるまでも尙義仲の側に在り義仲巴に打ち向ひ運命既に極まりぬ快く討死せん嚮にも義仲云ひし如く最後に女を連れたりと人の言はんも恥かしく其の上故郷へ誰ありて此の人々の討死の様を語らんや敵も手しげく見ゆるぞや早や立去れと言はるれば兼平も亦言葉を添へ様々諭し勸めけり巴泪をはらくと流し誠に木曾を出しより一日片時も離れ参らせず冥途までも御

供と思ひしものを是非もなし女と生れし身の因果さらば御暇申さんと名残は果しなけれども互に目と目とを見合はせて泪にむせびて立別れ志賀唐崎に差懸り弓引折りて杖につき信濃をさして落ちてゆく心中こそ不便なれ兎角する間に敵の兵又四方より寄せ来るを西に當り東に馳せ是を限りと戦ひしか皆悉く討死し義仲兼平主従僅か二人になりぬ義仲兼平に云はるるは日頃何とも思はざりし薄金 鎧の重く覺ゆるなり兼平申さく何條さること候ふべき御手爰に三十七御身盛りにあるものを味方に勢のなき故ならん兼平一人を千騎か万騎とも思し召せ終に死ぬべきもの故にわるびれ給ふな向ひなる岡に見わたる一群の松の

下にて御自害遊ばせ其の程防ぎ矢仕り頓て御供申をすべし義仲又も云
 はるゝは汝と一所に死なんと思ひ都を落ちて來しぞかし同じ枕に如何
 にもならん兼平又申すやう君茲にて御自害あらば我また爰にて討死せ
 ん同じく御供とこそ申すべけれ流石の征夷大將軍が雜兵原の手に懸り
 給はんこと末代までの名折なり疾く落給へと勸むれば尤もなりと云ひ
 つゝも岡の松原志し落ちてゆかるゝ其の際に今井は敵に相當り死物狂
 ひにぞ戦ひける義仲訣れて只一騎頃は正月廿一日入相近き程なれば溝
 氷は張りたり深田とも知らず馬をば乗り入れたり泥は深しあふれども
 馬も疲れて動き得ずさるにても兼平は如何なりしとふり返り見らるゝ

處を敵の兵石田の次郎爲久が追懸け來り放つ矢に内兜したゝかに射付
 られ痛手によわり其の儘に兜の眞甲馬の頭に押當てゝうつぶしけるを
 見るよりも石田が郎黨落合ひて終に御首を打落す哀といふも愚なり兼
 平此の様見るよりも今は誰が爲め軍せん是れ見給へ日本一の剛の者自
 害する様見覺へて手本にせよと云ふまゝに太刀の切先口にくはへ馬よ
 り眞逆のままに落ちたりしが刺貫ぬかれて死にたりけり嗚呼昨日まで旭
 と呼ばれし將軍も今日け粟津の夕露と消ぬて跡なき有様は楚王項羽が
 烏江にて亡びしさまもかくやあらんと思ふもいと哀れなり人生朝露

の如しとは斯る事をや云ふならん

薩摩琵琶歌 終

明治三十八年五月十二日印刷

明治三十八年五月廿五日發行

編輯者 中川史英

發行者 瀧川民次郎

東京市日本橋區馬喰町三丁目十四番地

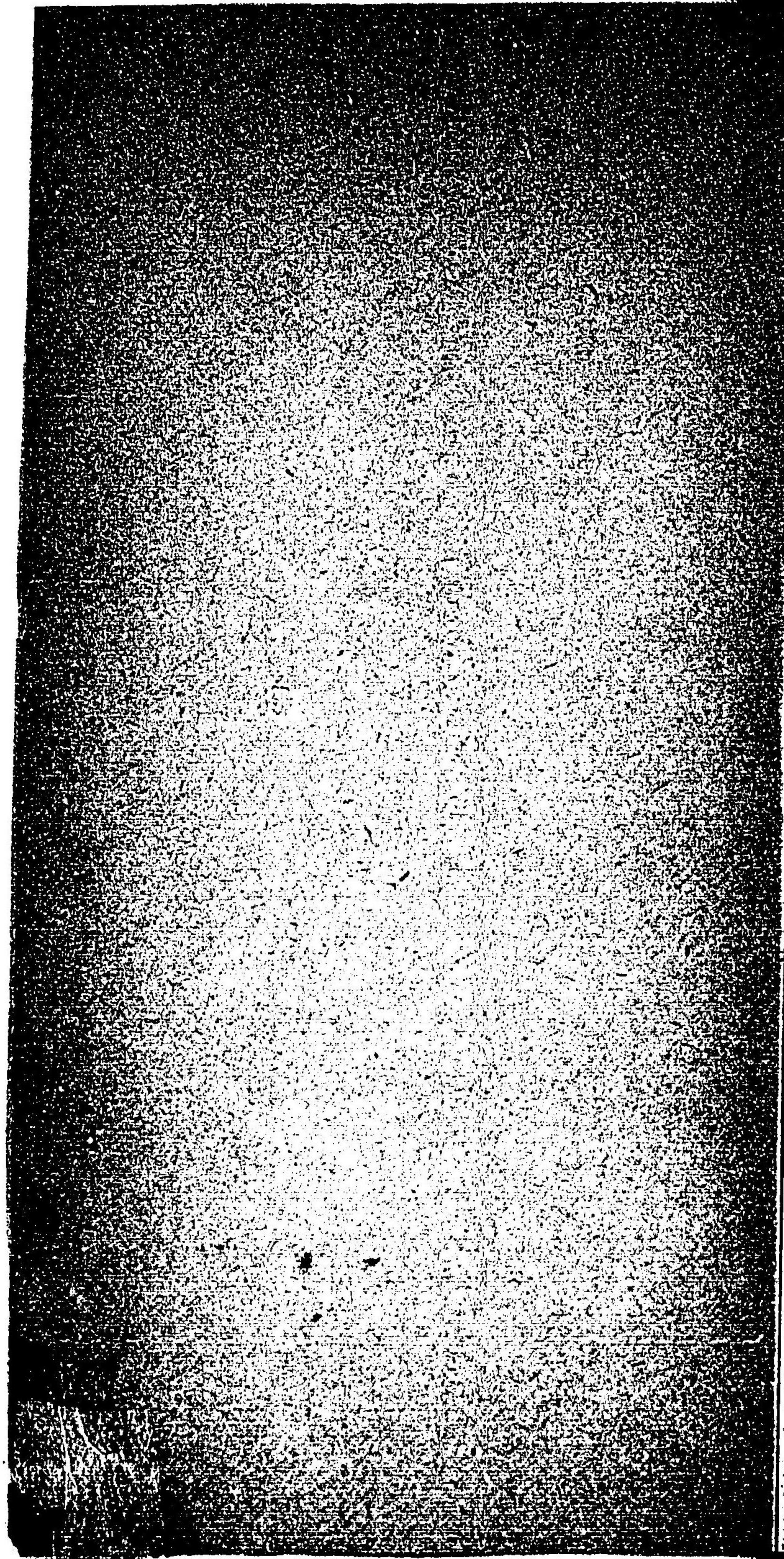
印刷者 松井 証次

不許複製

發兌

東京市日本橋區馬喰町三ノ十四

今古堂書店

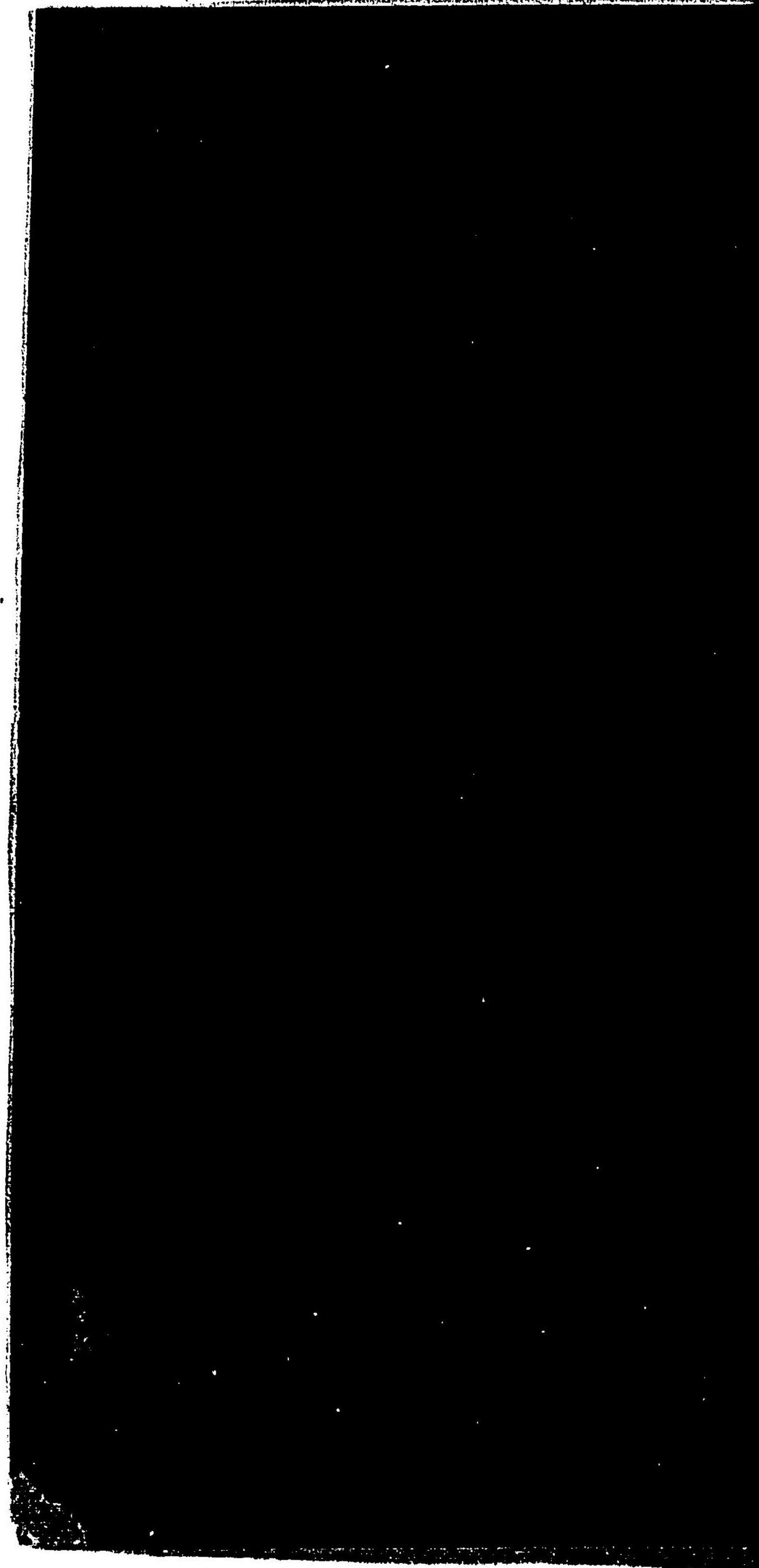


THE HISTORY OF THE
CITY OF
NEW YORK
FROM
1609 TO
1789

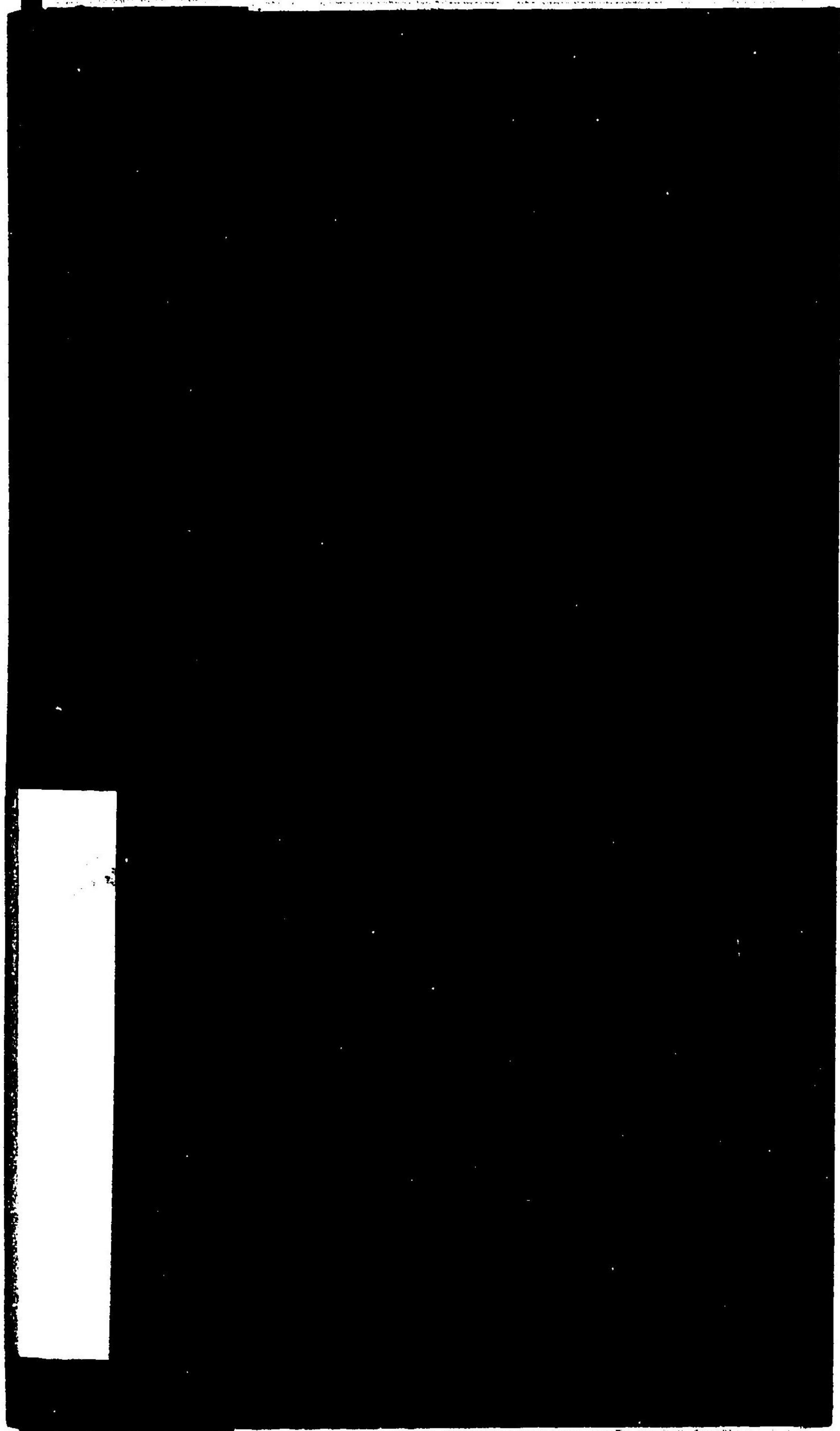
BY
JOHN B. HORTON

VOLUME I
FROM 1609 TO 1709

NEW YORK
PUBLISHED BY
J. B. HORTON
1898







特 63

665

074604-000-5

特 63-665

薩摩琵琶歌

柳涯 漁夫 / 著

M38

CEJ-0063

